



大正紀念
邑樂郡案內



御 大 典 記 念

邑 樂 郡 案 內



萬歲之聲

從一位大勳位
公爵實則書



萬歲之聲

公爵實則書

館林市立図書館
本館・550188

邑樂郡案内記序

此頃黒田湖琴君一書ヲ携ヘテ來テ余カ居ヲ訪ヒ之ヲ示シ
且序ヲ請フ余其書ヲ見ルニ題シテ邑樂郡案内記ト云フ今
其内容ヲ閲讀スルニ郡ニ關スル沿革地勢農工商ノ狀況其
他神社佛閣名勝舊蹟等洪纖遺スナク細大漏サス且行文平
易ニシテ簡勁加フルニ卷首ニ數十葉ノ口繪ヲ插ミ讀者ノ
心目ヲ樂マシム眞ニ其名ニ背カサルナリ抑モ案内記ナル
者人生經綸ニ必要ナルヤ大ナリ故ニ上ハ爲政者ニ在テ採
テ以テ經世資治ノ務ニ供シ下ハ農工商行旅ノ羅針盤タリ
且夫レ邑樂ノ地タル山容水態ノ景趣ニ乏シト雖モ氣候温
和ニシテ土地肥沃隨テ良圃千畝美田萬頃禾穀穰々トシテ
灌溉ノ便アリ加フルニ風俗ノ美他邦ニ超越ス今ヤ世運ノ
進歩ト共ニ商工業ノ途大ニ發展シ隨テ運輸交通ノ便至ル
處ニ設ク眞ニ天惠ノ良郷タリ蓋シ是レ其郡ニ長タル者施
政其宜シキヲ以テニアラズヤ黒田君此書ヲ編スル蓋シ感
アリ且以テ我が郷土ヲ偏リ世ニ紹介セントス善カナ此舉
ヤ余不文ト雖モ其社會ニ鴻益アルヲ嘉シ辭セスシテ此ヲ
記シテ以テ卷首ニ辨スト云フ

大正四乙卯臘月西風習々日

紫明樓主人識ス

はしがき

館林と云ふ語を耳にするたび、私は幼なき搖籃時代から幾十遍となく聞き古した「文福茶釜」の傳説トランプシヨシと、躑躅が岡の故事オウゴンとを想ひ起さずには濟まないのである。而も前者には徹頭徹尾童話めいた樂天的滑稽味が含まれてゐるに反し、後者の物語は終始哀歌的悲痛の情味をそゝる、斯うした二個の異つた傳説に對し、之れが保有者たる館林の地は、私をして久しい間憧憬の標的たらしめてゐた。「文福茶釜に毛が生えた……」云々の童謡を聞く毎に、私の眼には俳禪一味の茂林寺和尚が浮び、躑躅ヶ岡の傳説を繙く度び、其處には盡きぬ恨みを吞んで立つ凄艶な阿辻の姿が髣髴する。これ等は私をして一層館林に執着せしむる主因である。此の意味に於て私は此の書の刊行を欣ぶと同時に、編者たる黒田靜三氏に多大の敬意を表したい。

大正四年十二月

於青雲堂出版部

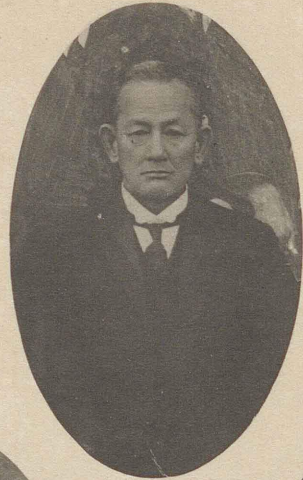
楊果行客

目次

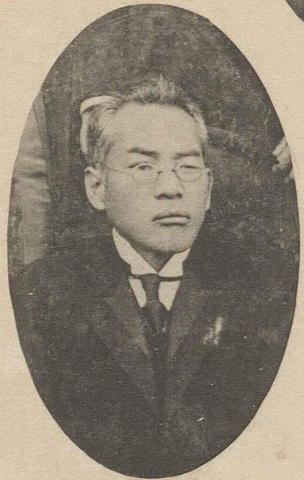
總論	一
町區劃	二
町驛	三
官衙公署	四
産業	五
普通農事	五
蠶糸業	六
機織業	六
會社	八
交通	九
教育	十
池沼	十一
神社	十二
寺院	十四
名勝	十七
舊蹟	十九
人物	二十二



町林館
氏三唯野星



長町林館
氏方直谷ヶ熊



町林館
氏七良室小



町林館
氏郎太宗田橋



長署務税林館
氏郎一本田岡



氏門衛右文田正 町林館



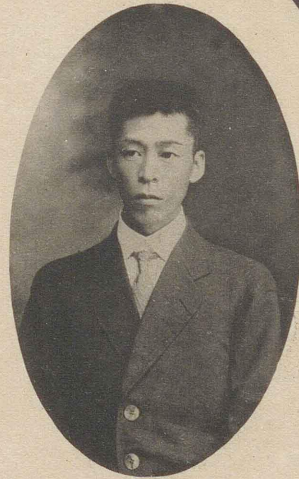
氏郎一喜樂金千 町林館



長校學農町林館
氏雄良村木



町林館
氏郎次甚保久大



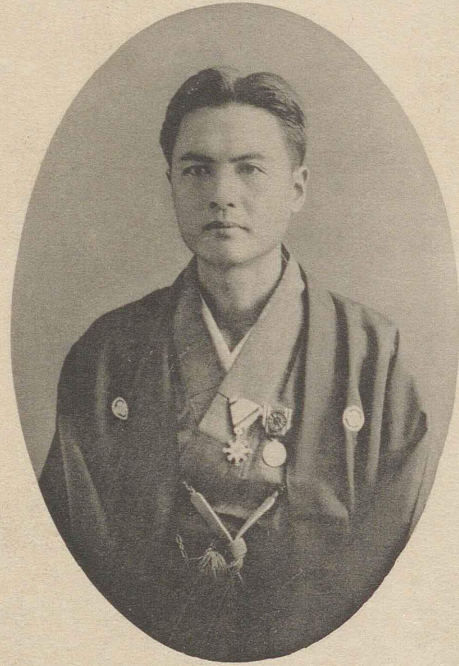
町林館
氏郎一恒下瀬



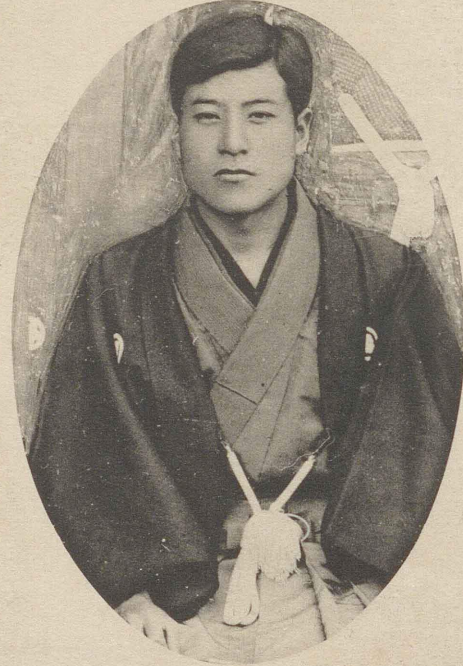
町林館
氏郎三市田島



町林館
氏郎三伊井白



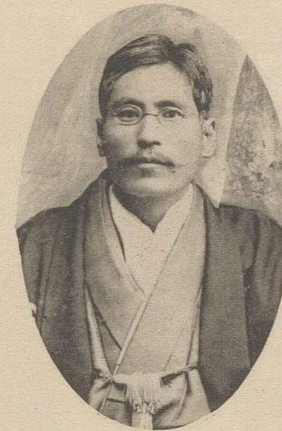
氏吉米間引町泉小



氏郎一喜旅若町泉小



氏郎五佐井新 長村柄長



氏橋原科三 町泉小



氏郎十喜永宮 村川大



氏郎三源井新 村樂永



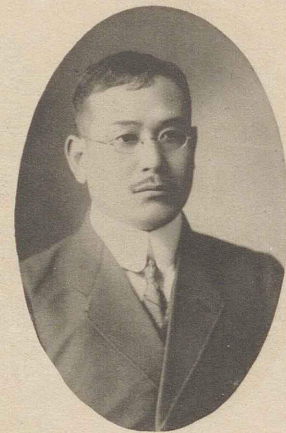
氏次良谷ヶ天 村島高



氏吉稚井金 長町泉小



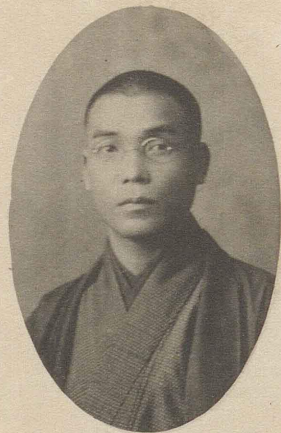
氏郎三眞口田 長村貫佐



氏郎太久中野 村田江千



氏七幸山丸 長村田江千



氏平治沼鯉 村貫佐



氏郎三幸澤黒 村島梅



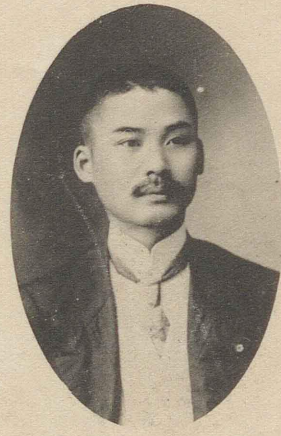
氏藏平庭保久 長村島梅



氏郎四榮本山 村島大



氏郎一嘉山青 長村島大



氏郎三通島野 村瀬渡



氏郎三治瀬高 長村野箇大



氏吉春田島 村田谷西



氏郎太市越堀 長村村瀬渡



氏郎三淳岸山 村良奈伊 員議會縣



氏郎太榮田鹽 村樂永



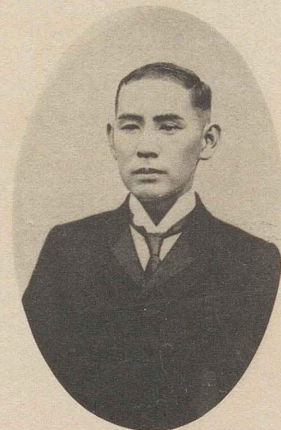
氏郎太達寺小



氏治民水清 長校學小村谷郷



氏郎十善際高 村良奈伊



氏郎一太島川 員議會縣前



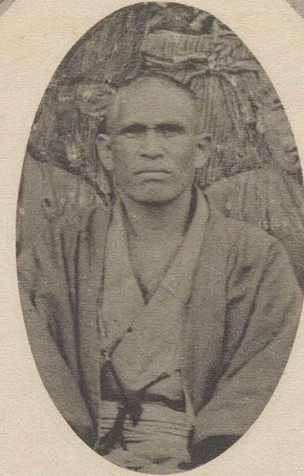
長村谷野三
氏藏永子金



村郷六
氏市佐坂赤



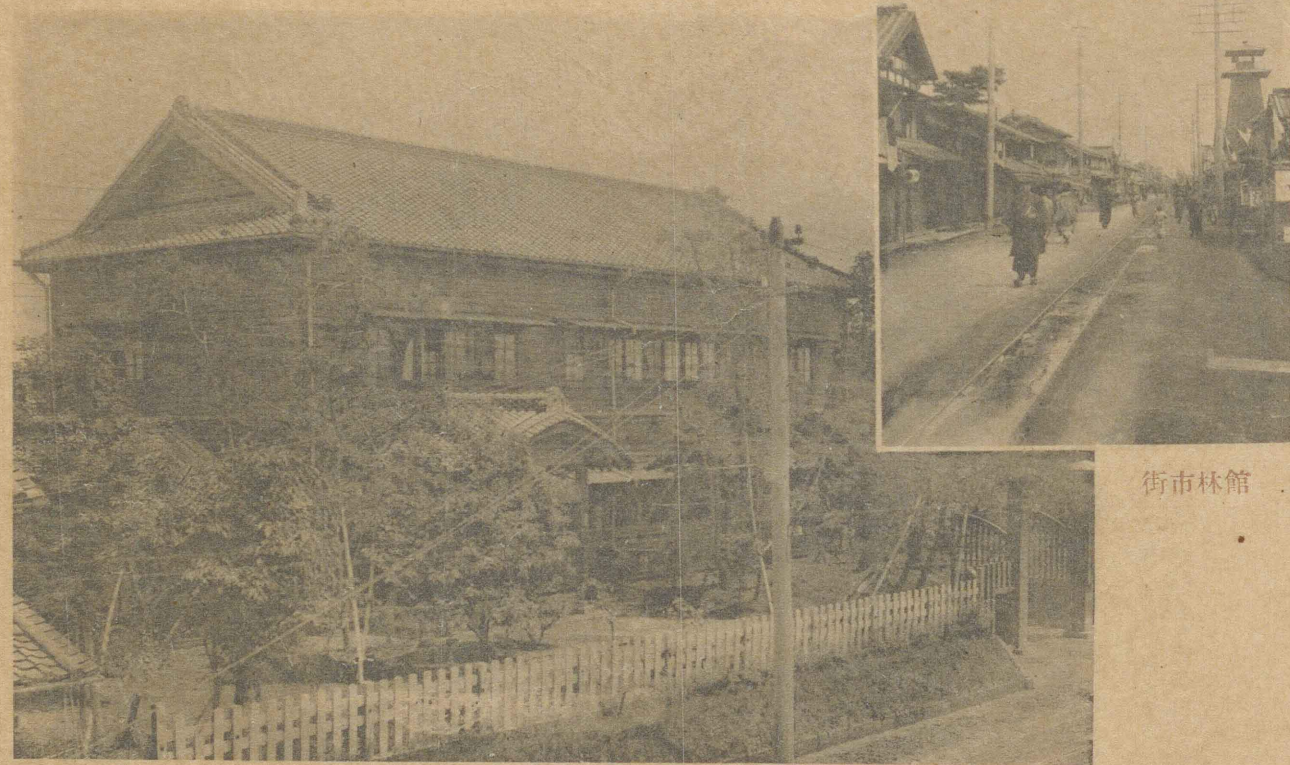
氏司知澤松 員議會縣



氏郎太兵井野山 村谷野三



氏郎太森橋高 長村郷六



街市林館

所 役 郡 樂 邑



員議會縣前
氏衛兵清井新故 村田江千



氏吉重井部田 長村羽赤



氏郎一惣川小 町泉小



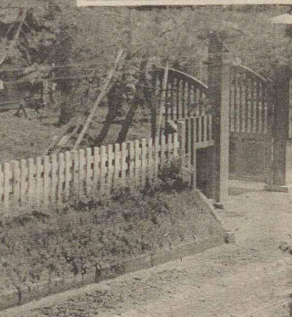
氏郎次高林小 村郷六



所 役 郡 樂 邑



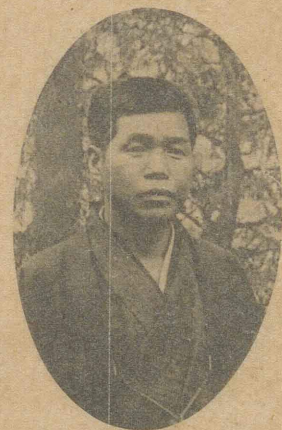
街市林館



員議會縣前
氏衛兵清井新故 村田江千



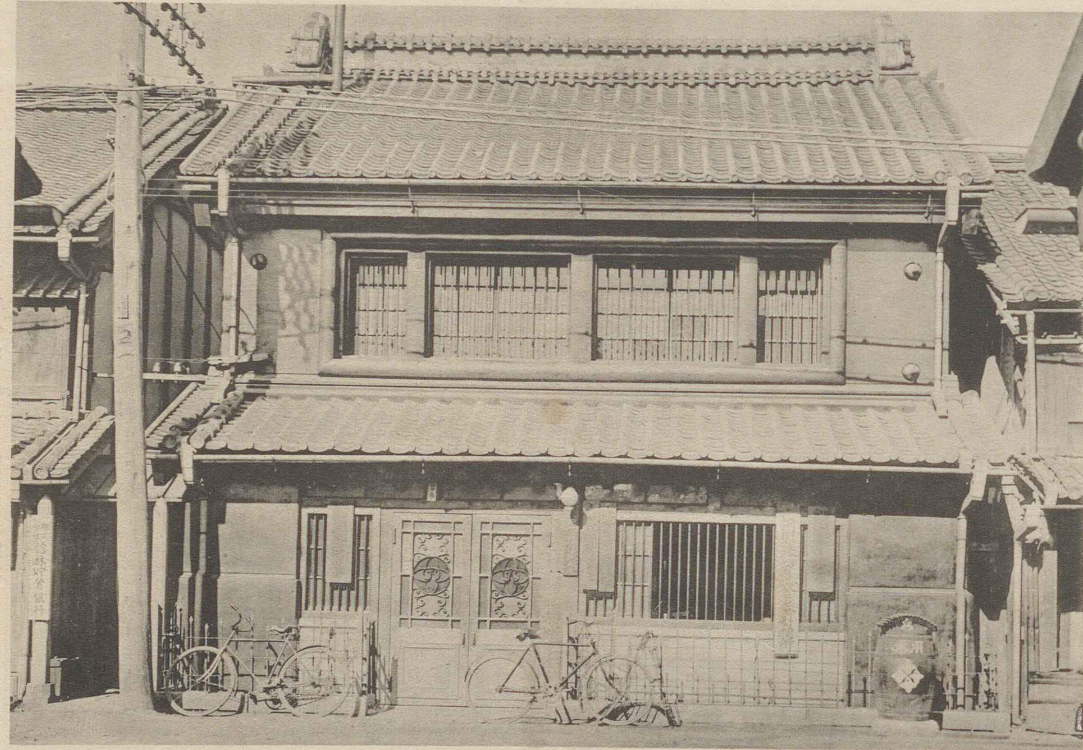
氏吉重井部田 長村羽赤



氏部一惣川小 町泉小



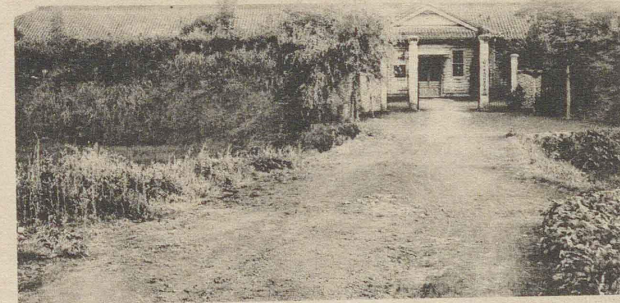
氏郎次高林小 村郷六



店支林館行銀十四 社會式株 町林館

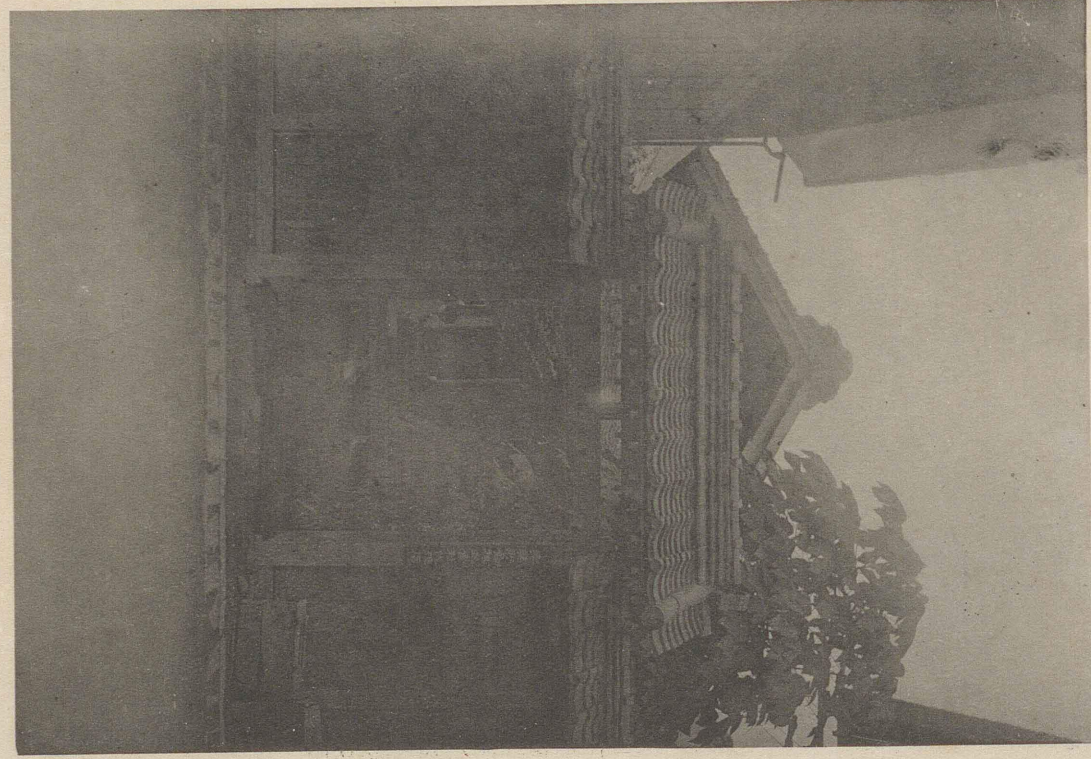


署察警林館

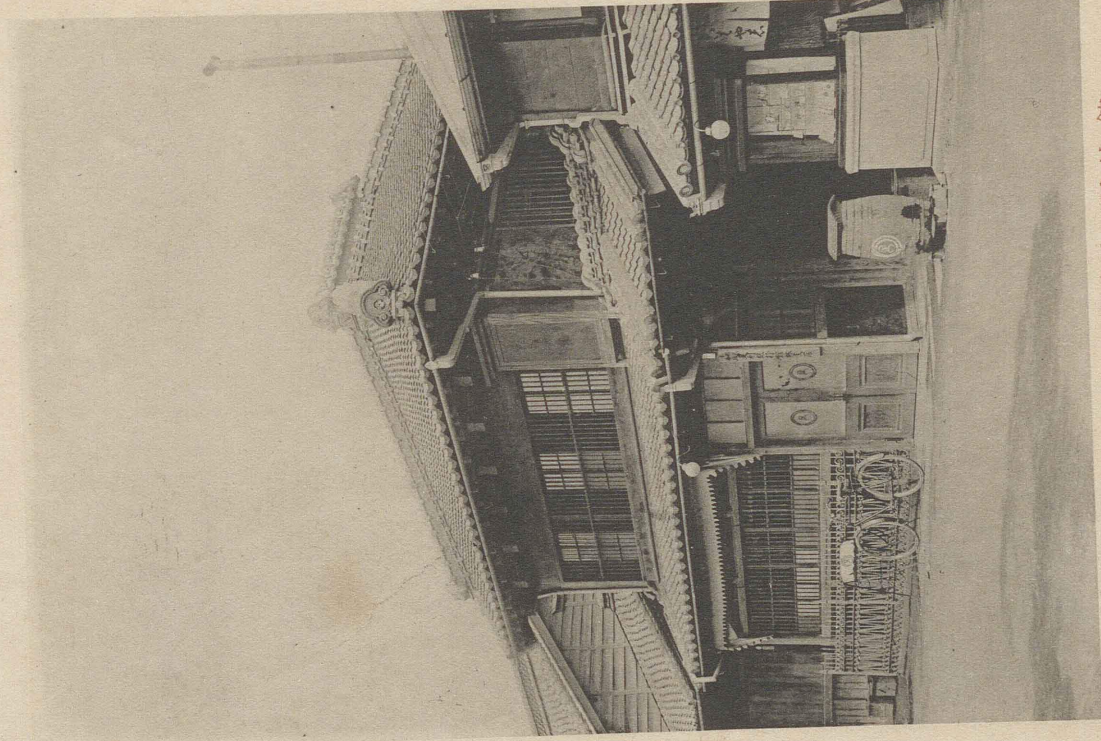


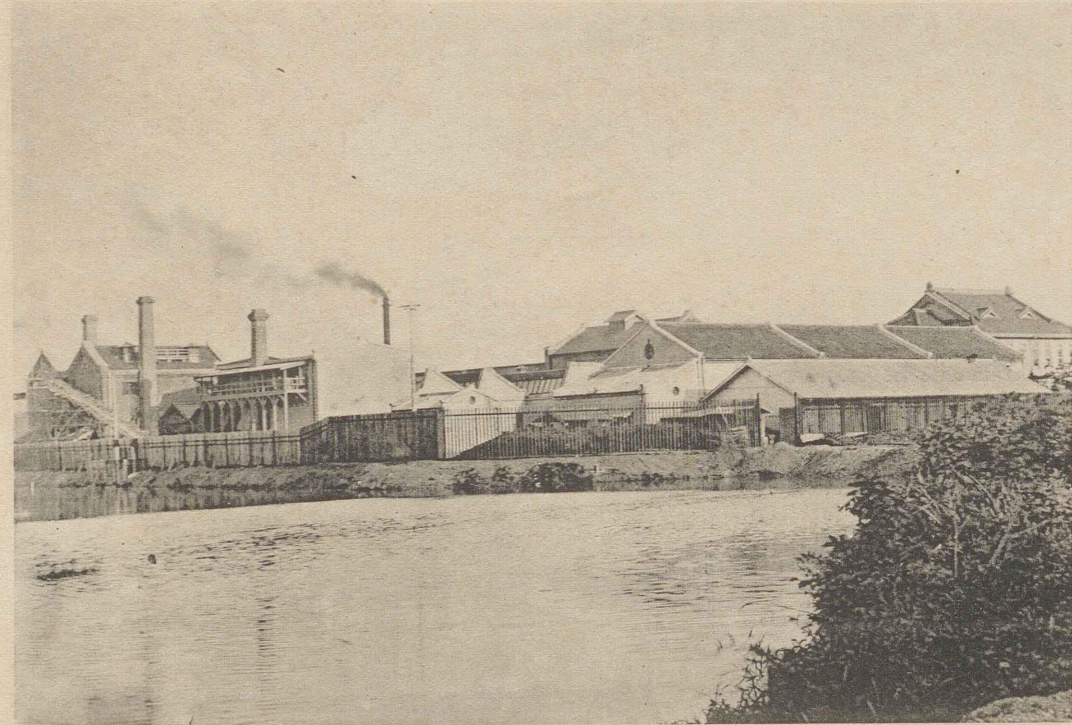
校學業農林館 立縣

店理代林館金貯業興 町林館

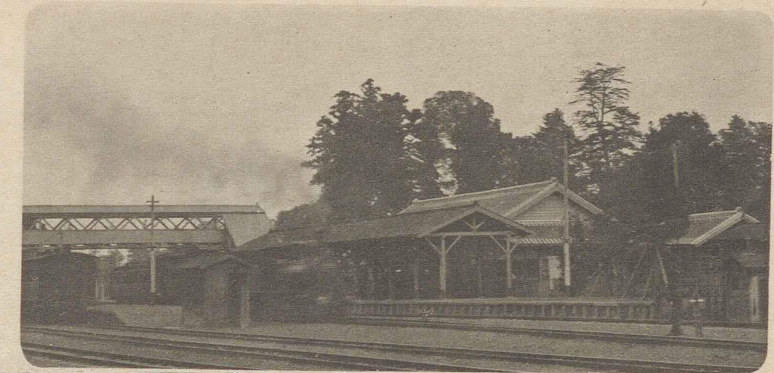


店支林館行銀利足 社會式株 町林館





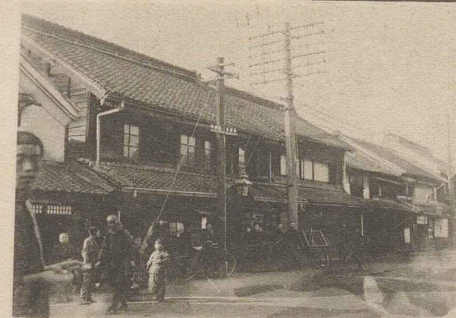
場工林館社會式株ソリスモ毛上 町林館



場車停林館



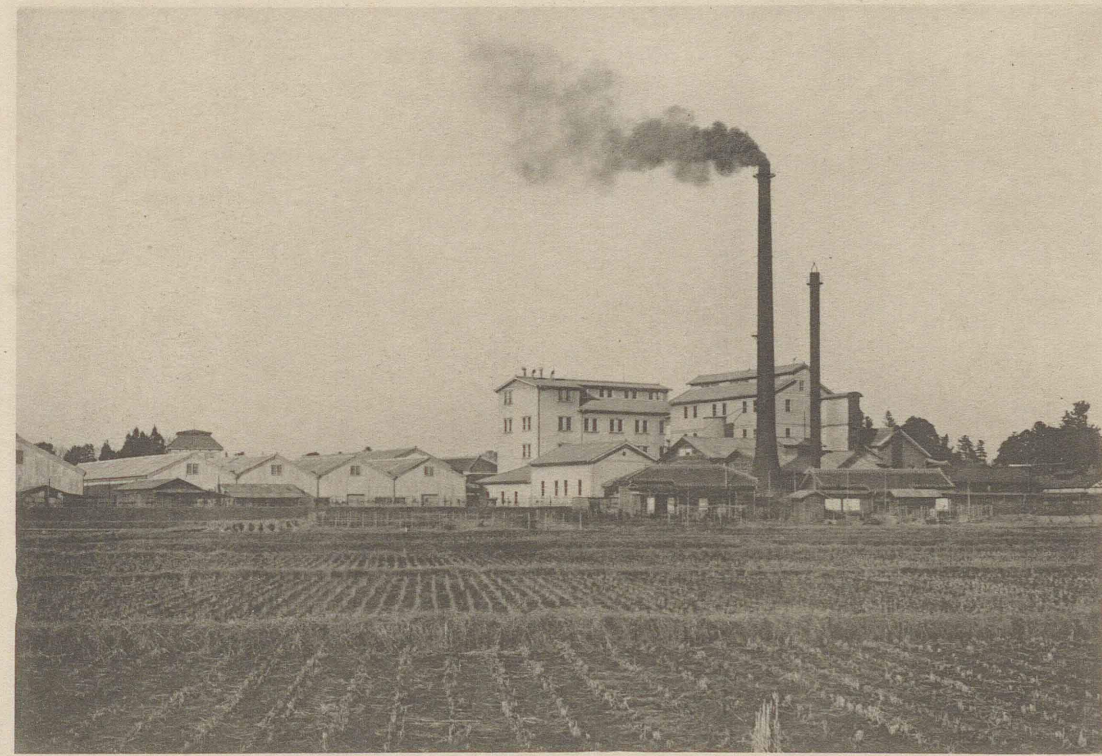
店理代林館行銀工商治明



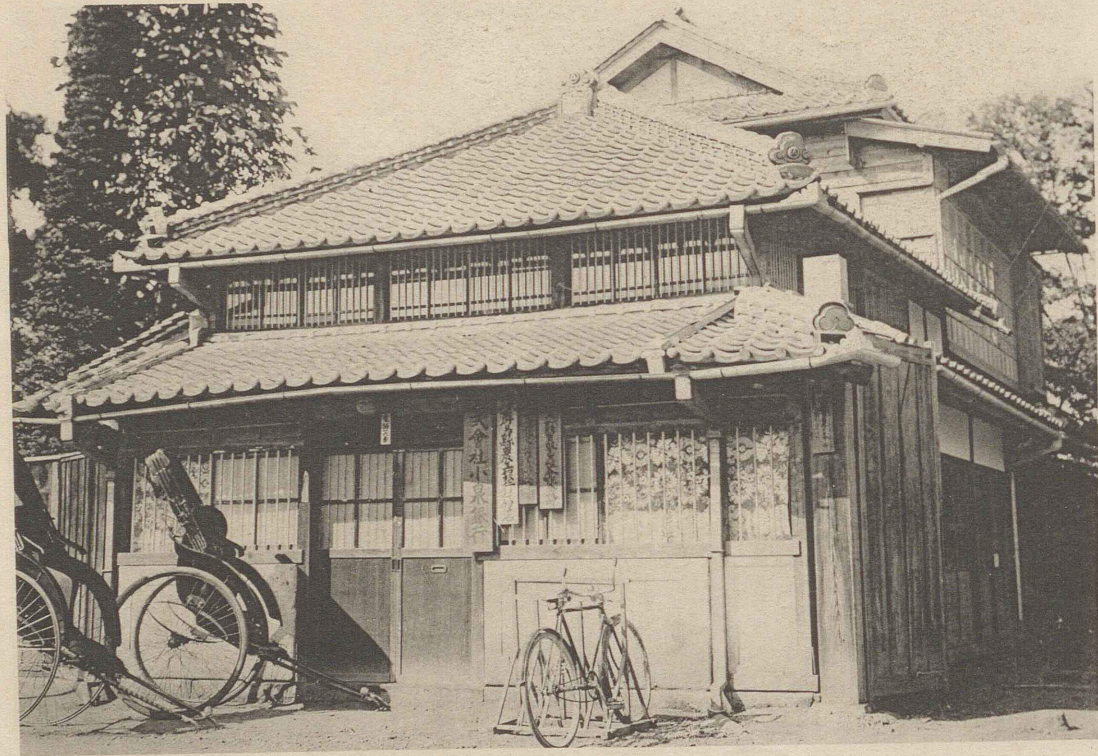
局便郵林館



町林館 館林系合資會社



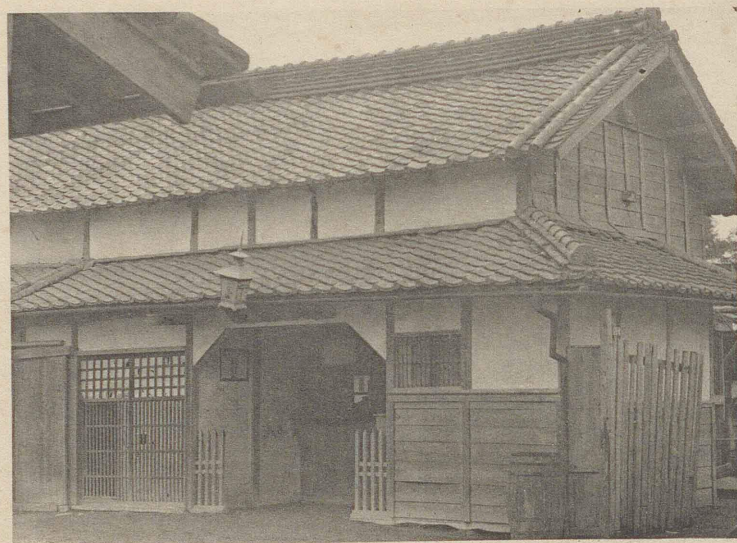
町林館 館林製粉株式會社



小泉町 株式會社小泉銀行



合名會社 館林運送店



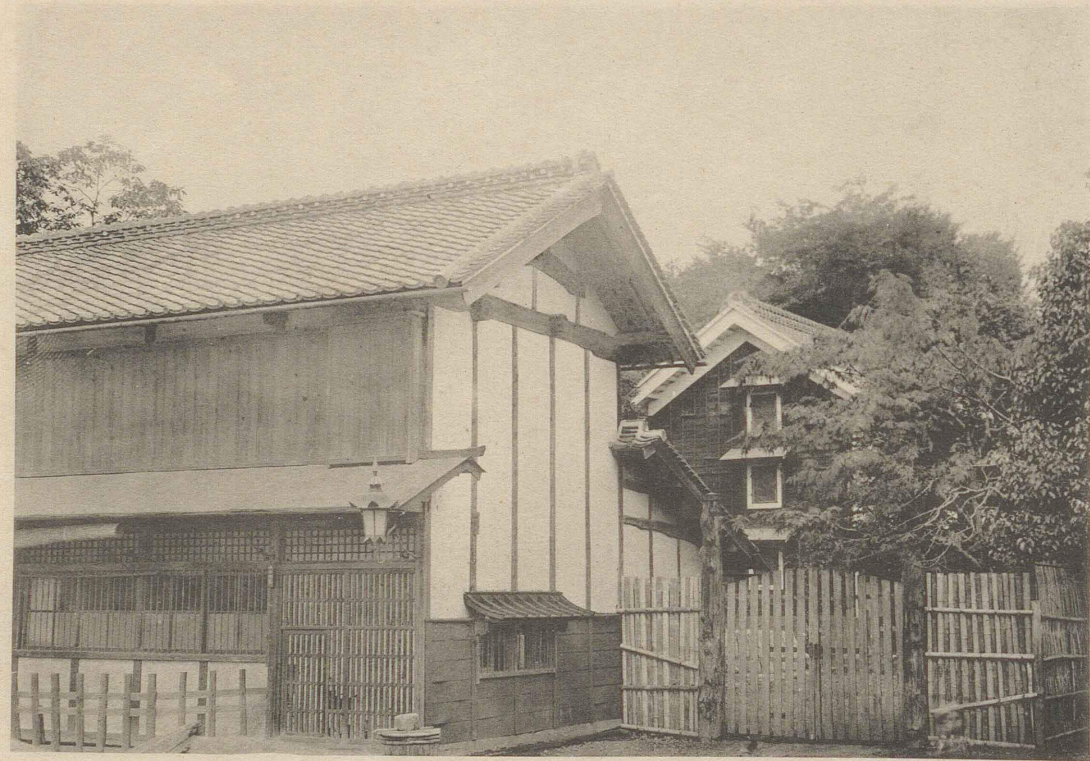
局便郵俣川 村貫佐



所務事合組業同物織樂邑



店支倉板行銀泉小 村良奈伊



永樂村株式會社赤岩倉庫



多々良村大谷原農園



(2)

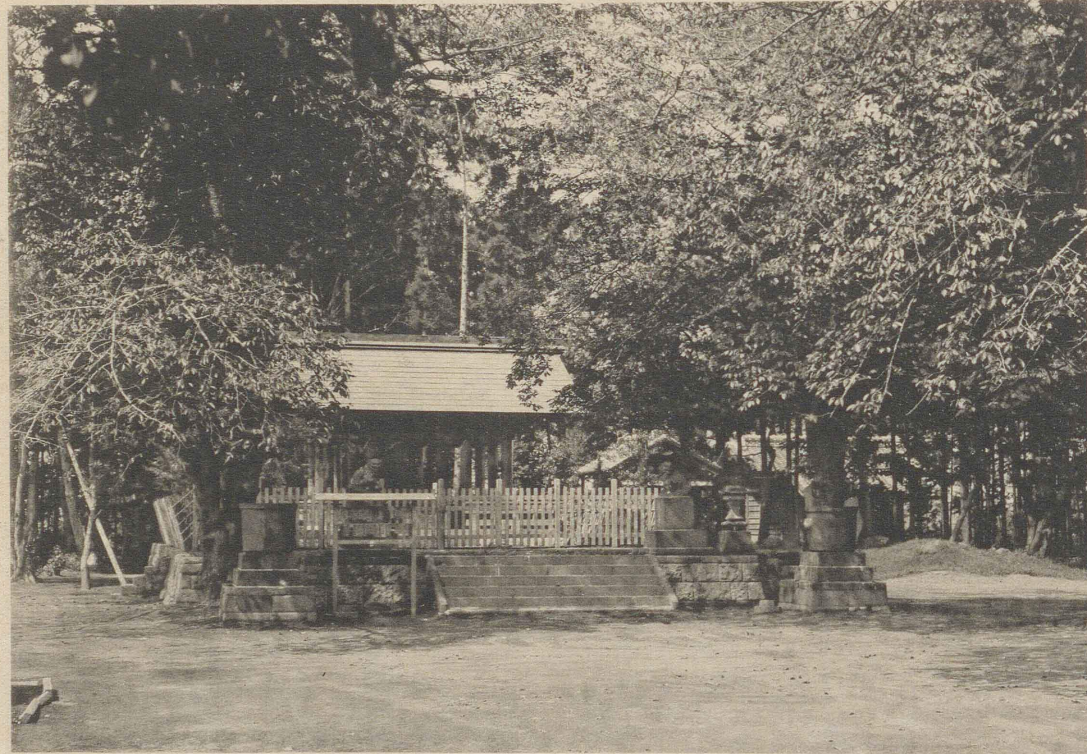


(1)

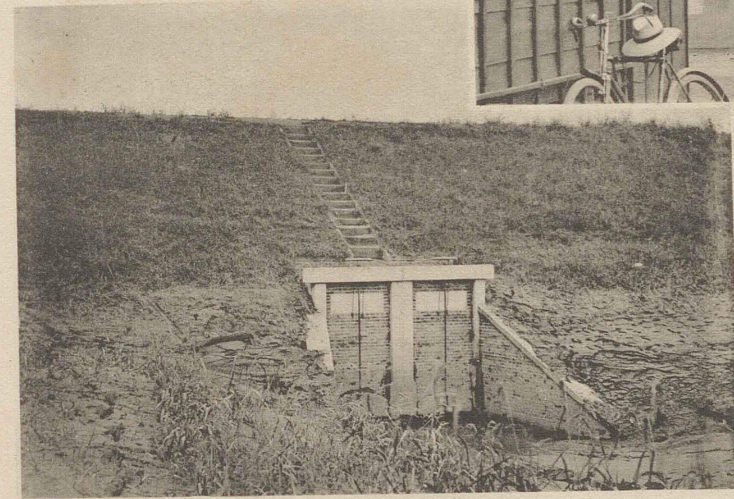
・ 理整地耕村ヶ二外町泉小



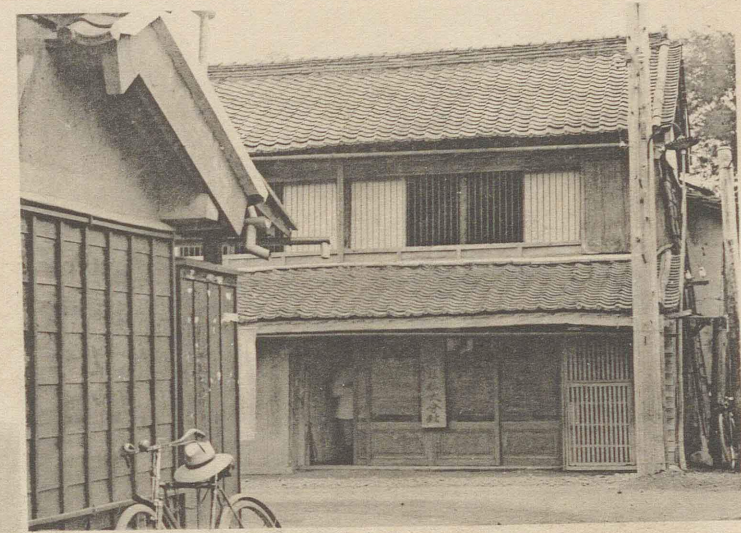
理整地耕村ヶ四外村永富



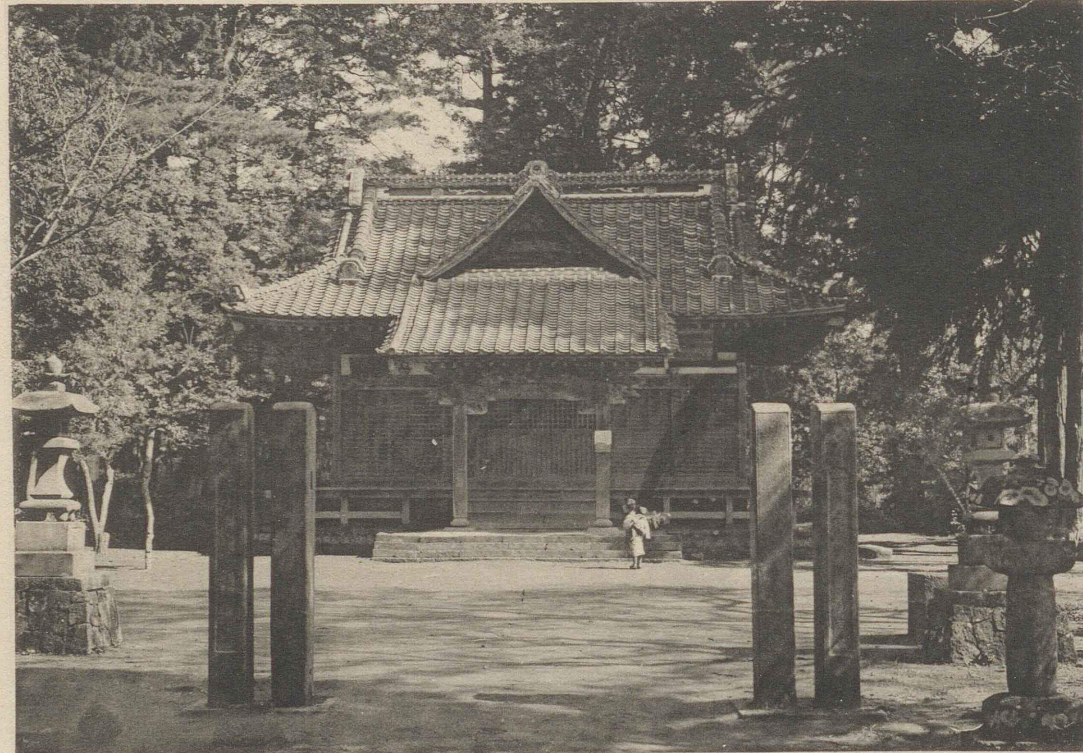
社 魂 招 町 林 館



岷 元 水 用 加 根 利



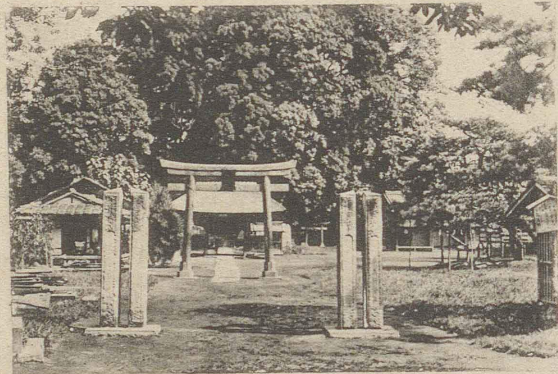
社 會 式 株 道 鐵 元 社 會 式 株 町 泉 小



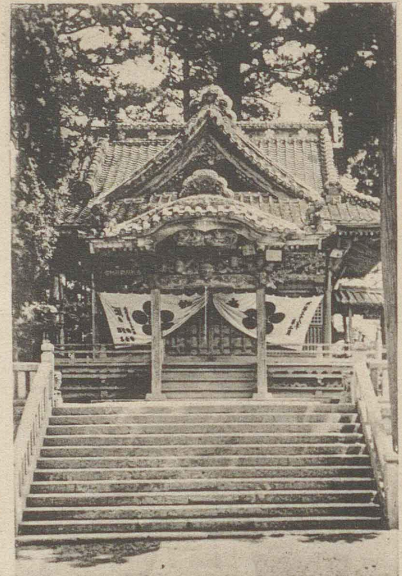
社 神 柄 長 村 柄 長



社 神 電 雷 村 良 奈 伊



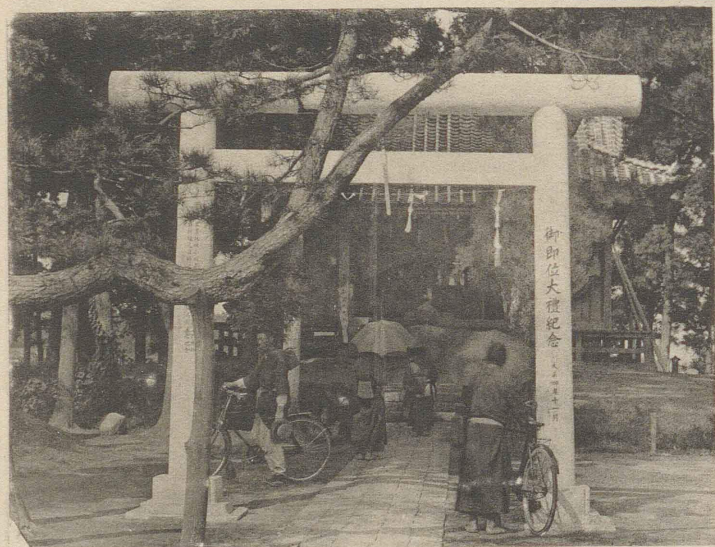
社神嶽士富 村郷六



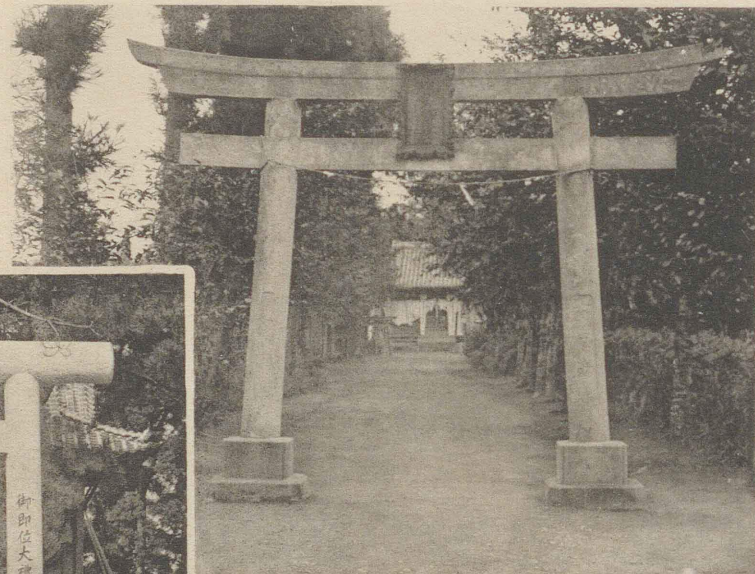
社神鳥高 村野箇大



社 神 丘 西 村田谷西



社 神 楠 村 羽 赤



社 神 荷 稻 曳 尾 村 林 館



社 神 島 兒 村 川 大



赤羽村 普濟寺

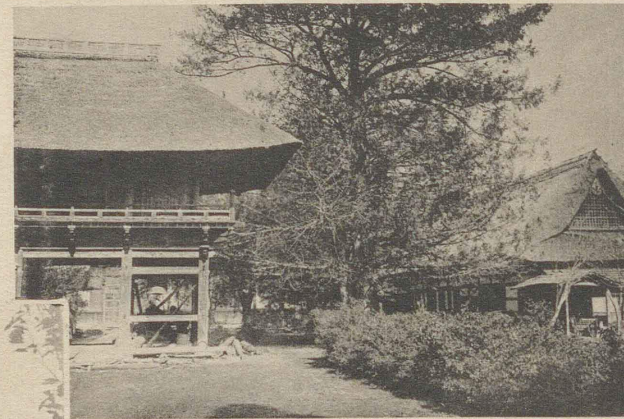


善導寺

徳川家康公御自畫



館林町善長寺



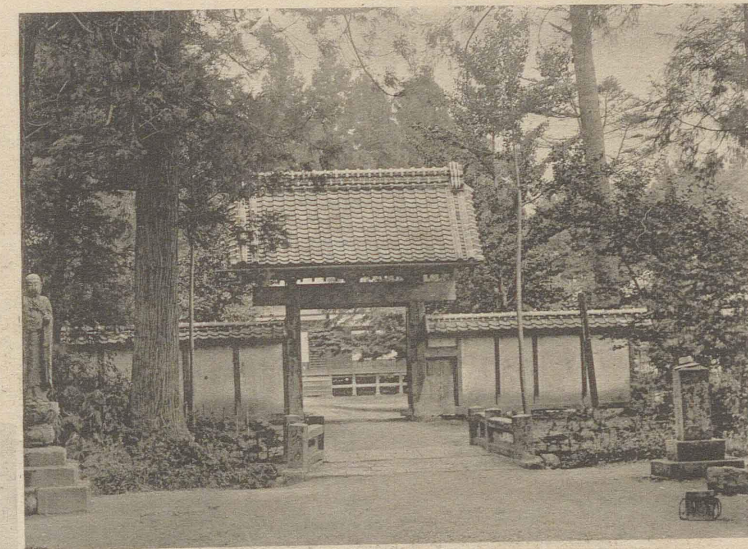
六郷村茂林寺



六郷村遍照寺



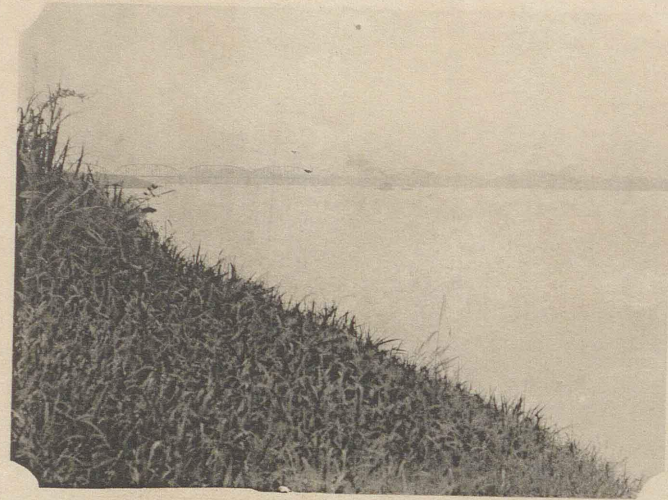
大川村高德寺



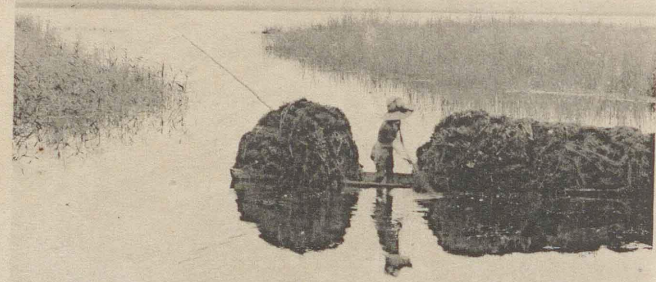
永樂村光恩寺



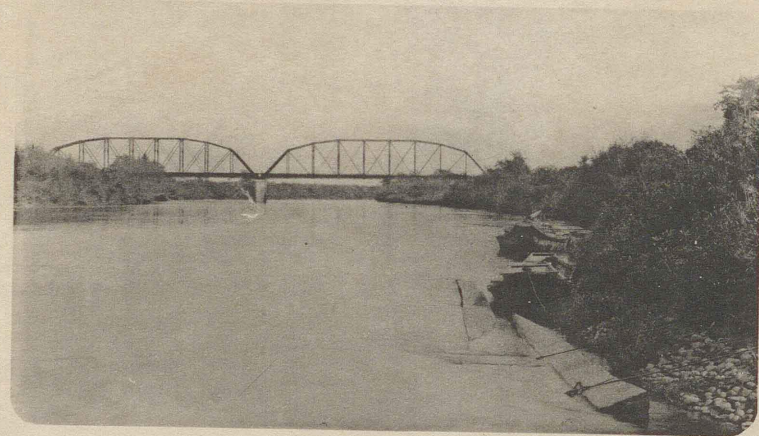
小泉町龍泉院



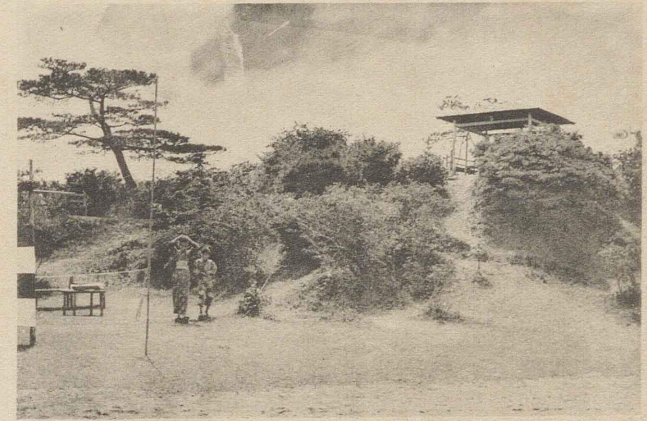
畔河根利



沼倉板村良奈伊



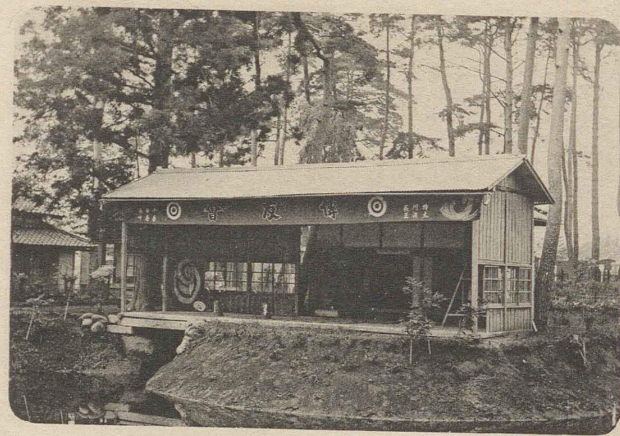
畔河瀬良渡



(一其)園公岡躑躅 町林館



(二其)園公岡躑躅 町林館



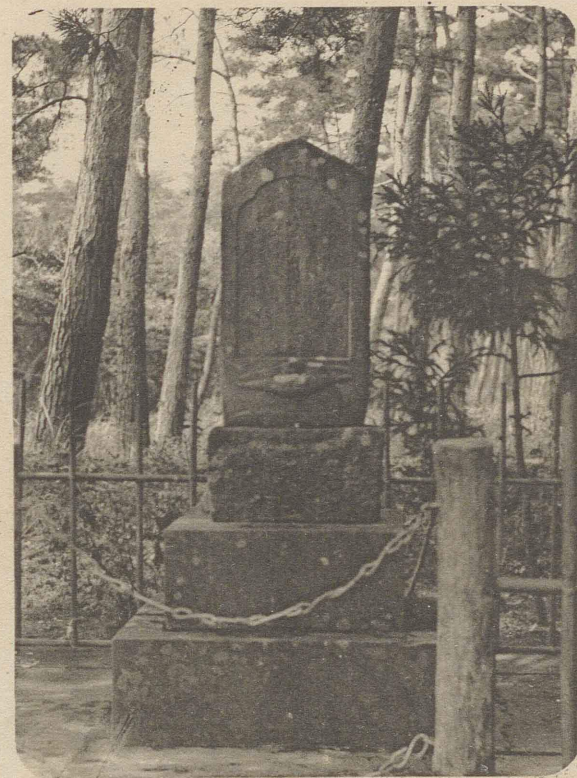
場武演會友博營經氏治 龜井



(園公丸の三)城曳尾 町林館



墓ノ光照井赤 村樂永

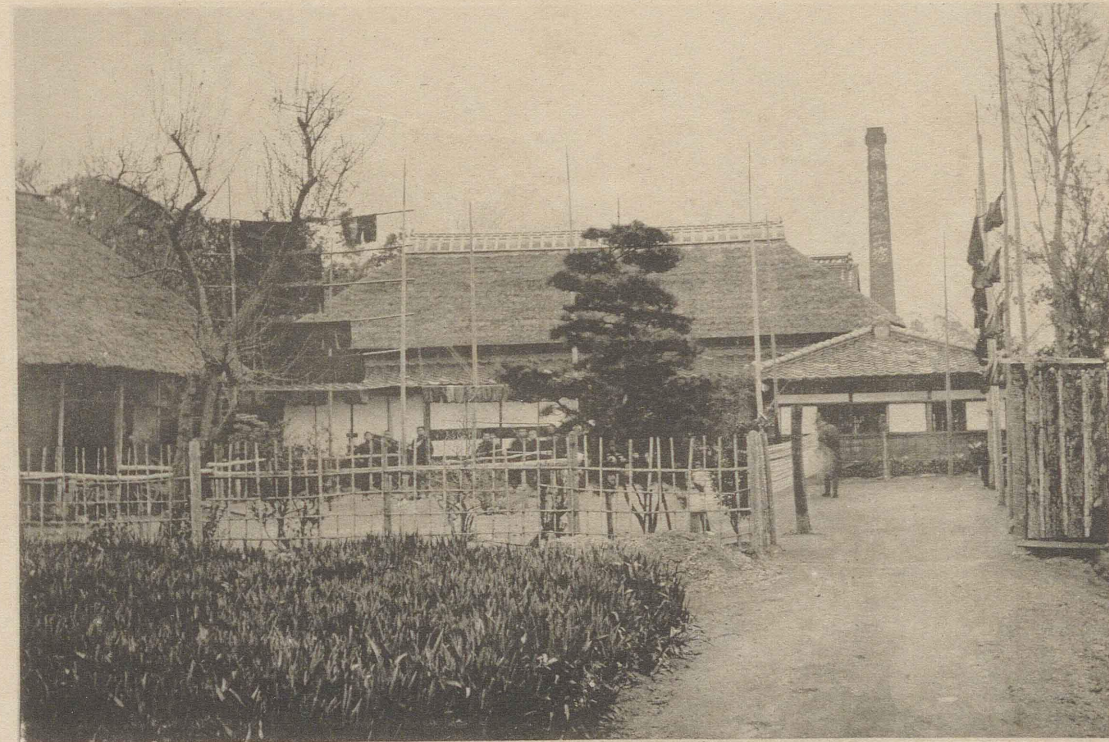


墓ノ泊休谷大 村良々多

9



店商郎次平岡上 元造製縮翁 町 林 館



塲工物織郎四辰岸山 村貫佐



店商吉平下真町泉小



院醫科齒井石町林館



店商田橋 元造製んとう山花町林館



店商門衛右文田正 町林館



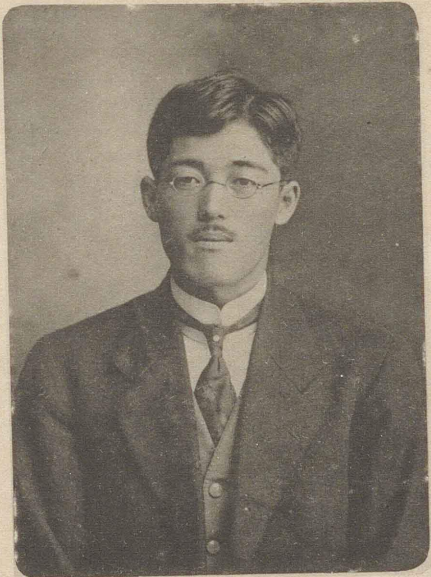
院 醫 生 康 村 郷 六

店商七藤井荒 町林館

凡例

一本書ハ御大典ニ際シ紀念トシテ編纂セシナリ
 一口繪ノ名士肖像ハ編者訪問ノ際隨時隨所ニ於テ撮影セシモノナレバ
 順序不同ナリ
 一本書ハ案内記ナレバ記事至テ簡單ナリ
 一世ニ往々羊頭狗肉ノ醜行ヲ成ス者アリ本書ハ夫ト觀テ異ニシ專ラ華
 ヲ去リ實ニ就キ正確ヲ期トス讀者幸ニ諒セヨ
 一本書編纂ニ際シ各官公署其他地方有志者ノ贊助ヲ得タルヲ特ニ感謝
 スル所ナリ、因ニ贊助員芳名左ノ如シ

- | | | |
|---------|--------|--------|
| 松本英一殿 | 高瀬平一殿 | 田島善兵衛殿 |
| 丸藤合名會社殿 | 鹽谷茂殿 | 大舘幾三殿 |
| 小林善吉殿 | 大塚源十殿 | 齋藤元吉殿 |
| 高瀬龜吉殿 | 原丈太郎殿 | 小島郁太郎殿 |
| 海上末治殿 | 始澤鶴治殿 | 毛塚善六殿 |
| 工藤圭馬殿 | 増尾小源次殿 | 新井金二殿 |
| 茂木民次殿 | 森下亥十殿 | 蘭部周吉殿 |
| 圖司榮次殿 | | |



三靜田黒人輯編

邑樂郡案内

黒田湖琴編

總論

邑樂は元と於波良岐と稱し或は大荒木と云ふ上野國の東南端に位し東
 西に亘りて長く南北に狭し地形恰も鳥の嘴の如く西は新田山田の二郡
 に隣り南は利根川を隔て、武藏國に北東は渡良瀬矢場の兩川を疆りて
 下總下野二國の間に突出す東西六里十六町南北二里十九町面積十一方
 里餘あり全郡山嶽一起なく平衍にして沃野展開す唯東北部は濕地多し
 是池沼多くあるを以てなり地味塩堊色黒にして赭色を帯び或は濃灰色
 にして米麥桑茶蔬菜等に適す氣候最も温和にして極暑も攝氏二十八度
 より昇らず極寒も八度より下らず然れども概ね寒長く暑短し蓋し是三
 面遙巒遠峰擁緩せしに因てなり戸數一万三千餘人口八万八千餘全郡を
 區分して二町二十ヶ村となし細別して九十四ヶ村となす古來上野國の
 統治に屬し中古佐貫庄となり鎌倉氏以降山内上杉氏後北條氏等屢統治
 の變遷を経て天正十八年徳川氏の關東八州を總括するに及んで其臣柳
 原康政を館林城に封せし以來城主の管轄となり或は時代に依りて代官
 支配し旗下の朱地あり以て維新に至る明治元年大島、西谷田、海老瀬
 大箇野、伊奈良、干江田、佐貫、三野谷、富永、永樂の諸村は岩鼻縣
 に屬し其他は館林藩に屬す明治四年七月館林縣を置き全郡を統べ全年
 十一月栃木縣の管轄に屬し九年八月群馬縣となり十一年十二月邑樂郡
 役所を館林町に置き爾來之が管理に屬す物産は米、麥、大豆、小豆、
 桑、茶、織物、生糸、繭、瓦、酒、種油、味噌、醬油、蠶種、鮎、鰻
 鰻、鯉、鮒、鯰、鱒、蓴菜等なり

町村區劃

町村名	役場所在	大字名
館林町	大字館林町	館林町、谷越村、當郷村、成島村
郷谷村	全 當郷村	當郷村、新當郷村、田谷村、四ッ谷村、館林町
大島村	大 島 村	除川村、西岡村、西岡新田、大曲村、大荷塲村、細谷村、離村
西谷田村	全 除川村	
海老瀬村	海 老 瀬 村	
大箇野村	大字大高島村	大高島村、飯野村、下五箇村
伊奈良村	全 岩 田 村	岩田村、板倉村、穀谷村、内藏新田
赤羽村	全 羽 附 村	羽附村、赤生田村
干江田村	全 江 黒 村	江黒村、田島村、江口村、干津井村、斗合田村
梅島村	全 新 里 村	新里村、南大島村、梅原村、中谷村
佐貫村	全 須 賀 村	須賀村、川俣村、大輪村、大輪沼新田、大佐貫村、矢島村、入ヶ谷村
六郷村	全 新 宿 村	新宿村、松原村、小桑原村、堀工村、青柳村、近藤村
三野谷村	全 上 三 林 村	上三林村、上三林村、入ヶ谷村、野邊村、萱野村、矢島村
富永村	全 上 五 箇 村	上五箇村、上中森村、下中森村、萱野村、木崎村、瀬戸井村、赤岩村
永樂村	全 赤 岩 村	赤岩村、舞木村、新福寺村、福島村、鍋谷村、瀬戸井村
大川村	全 仙 石 村	仙石村、古海村、吉田村、寄木戸村、古水村、坂田村
小泉町	全 上 小 泉 村	上小泉村、下小泉村
高島村	全 藤 川 村	藤川村、石打村、秋妻村
中野村	全 中 野 村	中野村、鶉村、鶉新田、光善寺村

長柄村	大字篠塚村	篠塚村、狸塚村、赤堀村
多々良村	全 高 根 村	高根村、成島村、日向村、木戸村、谷越村
渡瀬村	全 足 次 村	足次村、岡野村、傍示塚村、上早川田村、下早川田村、大新田

町 驛

館林町は郡の中央に在り郡中第一繁華の地たり戸數貳千四百餘人口一萬貳千餘商戸櫛比し百貨輻輳す郡役所、警察署、町役場、稅務署、小學校諸會社等あり東武鐵道線は町の西方に敷設し館林停車場あり電線縱橫交架し郵便電信局及利根發電株式會社あり始め赤井照康弘治三年館林城主となりし時佐貫町より三百五十餘軒を此に移す其後元龜元年長尾顯長の時に及び町支配を青山出雲小寺丹後の二人に命じて檢斷役となす當時外加法師より土橋善長寺に至る間町場六百餘軒ありと云ふ天正十八年城代南條因幡、外加法師町を下外張に移し町名を暨町、連雀町、並木町とす十九年二月榊原康政徳川氏に請ひ溝渠を外加法師より下外張迄穿ち之を本城外郭となす土居を築き町割を其内に定劃し下外張町を移せり今の市街地是なり弘化二年秋元志朝城主たるに及んで館を館に改む明治四年十一月由來屋敷町商人町の區分ありしが合併して館林町となす

小泉町は郡の西部にあり元と驛と稱せしが後町と改む戸數六百餘、人口三千三百餘あり又一小繁華の地たり此地古より十能瓦を産出し小泉瓦と稱し其名遠邇に著る町役場、郵便局、世良田銀行支店及諸會社、

小學校等あり新田郡太田町に通ずる要路たるを以て車馬の往來絡繹たり里傳に仁壽三年藤原長良當國に任せられ宮府を當邑に造營す會井水を鑿せしむるに靈泉湧沸し地に溢る因て水路を分ち數町の水田を開闢す是に因て小泉と稱すと云ふ

川俣驛は郡の南方佐貫村大字川俣村にあり戸數六十餘古は狹斜の地たるを以て繁殷館林に亞きしが近來頗る衰態を極め絃歌の聲斷え隨て綺羅粉黛杳として影跡を留めず今や昔日の俾全く消え唯た商戸所々に點在するを見るのみ郵便局、川俣架橋合資會社等あり

板倉驛は郡の東方伊奈良村大字板倉村にあり戸數百五十餘漁業を以て繁盛なり驛の北方板倉沼畔に雷電神社あり毎歲春和景明の時會其開龜に當るを以て參詣する者多く爲めに全驛頗る殷賑を極むと云ふ郵便局銀行等あり

赤岩驛は郡の西南永樂村大字赤岩村に在り戸數百餘利根川の沿岸に臨み船舶碇泊するを以て頗る盛なり近來商工業の發展に伴ひ此地隆盛を極め今や校書軒を並べ到る處絃歌沸騰し衣香釵影紅燈綠酒と相照映し宛然花柳の郷たり役場郵便局、赤岩倉庫株式會社等あり

官 衙 公 署

邑樂郡役所 明治十一年十二月郡區編制に際し初めて邑樂郡役所を館林町字谷越町に設置し郡内一町八十八ヶ村戸長役場を統轄す後字足利町に移りて民舎を假用せしが全四十二年七月字大名小路に地を卜し新築す現郡長は塙任氏なり

館林警察署 廢藩置縣の際館林町に邏卒を置き警察事務を取扱ふ明治九年字谷越町に假出張を置き今年十月警察館林出張と改む十年二月館林警察署と改稱す十一年八月廳舎を新築せり現署長は新井明氏なり

館林稅務署 明治維新の際稅務は地方官制の一部に屬し縣知事の職務權限に屬せり然して或る一部を郡長に取扱はしむ後明治二十二年四月各所に收稅部出張所を置き創めて館林町に收稅部出張所を設く全廿九年稅務官々制を改定するに及び稅務署と改む四十二年太田稅務署を廢して館林稅務署の管轄に屬せしめたり

産 業

由來本郡は利根渡良瀬兩川の間に介在し山嶽一起なく流域に屬して平衍耕野展開して水利の便乏しからすと雖も陸上の交通頗る不便にして各種事業の發展上遺憾尠からざりしに明治四十年東武鐵道の郡の中央を貫通したるを始めとし佐野線の開通するあり帝都並各地との聯絡茲に完備し諸般の事業其緒に著き益々向上進歩の道程に在り

普 通 農 事

本郡の耕地反別は田四千三百七十三町六反三畝、畑六千七百十七町九反二畝計壹萬壹千九十一町五反五畝にして農業戸數は專業八千三百二十九戸兼業二千七百四戸なり之を自作小作に細別すれば自作二千九百五十二戸、自作兼小作五千四百四十五戸、小作二千九百二十六戸更に此を五ヶ年平均一戸當り耕作地及就業人員を調査するに一戸に付耕地九

反九畝就業人員四人の割合を示す

米 大正三年度に於ける水陸稻作付反別五千六百五十町九反收穫高五萬六千二十四石七斗にして反當り約一石を穫たり之を他郡に比較して稍々少なきの觀ありと雖も开は東部數村の水害を蒙り收穫皆無地ありたるに因るなり抑々風伯雨師の襲來は本郡に於て最も恐るべき災害にして一朝事あるときは潦水聚り河水注きて滞滯約數箇月に迫り郡東半部の作毛を全部水泡に歸することあり

麥 本郡に於て最も誇るべき農産物にして館林麥の名は到る所の市場に喧傳せらる客年の作付反別五千四百二十五町二反一畝收穫高十萬六千六百二十一石にして内大麥八萬二百三石、裸麥三千六百五石、小麥二萬二千四百五十三石とす

蔬菜根菜 は赤羽村及伊奈良村を以て著名の産地とし夏季七月より九月に至る三ヶ月間館林青物市場に於て取引せらるるもの南瓜、茄子、胡瓜類一日金千圓以上と註す園地延反別六百餘町にして年産額二十二萬餘圓に達す、果樹は桃、柿、梨、梅、栗等にして六郷、赤羽、千江田村に多く産し年産額十二萬餘圓を示す

蠶 糸 業

本郡の養蠶は逐年發達し來りしが水害及河川改修に買收せられ約五百町歩を失ひたり依て爾來専ら復興に努め現在桑圃八百六十四町五反歩なり

春蠶は掃立戸數三千五百十四戸枚數六千九百六十五戸收繭量六千八百

六十八石此價額十八萬八千五百七十七圓を産す

夏秋蠶は掃立戸數二千五百九十四戸枚數三千九百七十三枚にして收繭量二千二百六石此價額六萬二千四十三圓なり

蠶種の製造は輓近大に發達して大箇野、千江田、梅島附近に亘り約五十戸の製造家あり大正三年の製造高普通一萬四千二百六十七枚特別二萬四千三百八十三枚總價額金三萬七千二百四十九圓にして同業組合を組織して益斯業の發達を圖りつゝあり

製糸業は僅に富永村及小泉町附近に製糸家散在するに過ぎず邑樂社を除くの外凡て座繰製糸にして年生糸千三百七十九貫匁糸二百貫匁此價額約五萬七百圓を産出せり

機織業邑樂織物輓近館林市場の開市と共に織元各地に激増し現に百四十八戸あり是等織元の産出する製品は客年百萬三千七百十七點價額百三十四萬八千二百十五圓を算す

賃織業は本郡婦女子唯一の副業にして現に六千六百三十戸工女七千四百八十八人あり中産以下の婦女子は殆むと之に従事するものにして郡内到處機響を聞かざるなく一郡學て工場地たるの觀を呈し甚だ盛況なり

特別織物はモスリン、綿縮にして一ヶ年の生産額モスリン六百八十七萬一千六百二十三碼價額百九十九萬三千圓綿縮二十萬九千八百反價額二十五萬三千三百十五圓なり

名	稱	創設年月	資本金
上毛	モスリン株式會社	明治三十五年四月	四百萬圓
	日清製粉株式會社 館林工場	全 三十四年五月	百七拾萬圓
	株式會社 四十銀行館林支店	全 三十一年七月	貳百萬圓
	株式會社 足利銀行館林支店	全 四十年二月	百萬圓
	株式會社 館林貯蓄銀行	全 二十八年七月	五萬圓
	株式會社 小泉銀行	全 四十五年七月	八萬圓
	赤岩倉庫株式會社	全 三十三年五月	貳萬五千圓

重要物産同業組合

名	稱	所在	營業種類	設立年月
邑樂	織物同業組合	大字中野村	織物製造業	明治卅二年四月
邑樂	繭糸同業組合	大字下小泉村	繭、生糸業	全三十八年三月
邑樂	蠶糸尙業組合	大字大高島村	蠶種製造	大正元年九月

市場

名稱	賣買品目	所在地名	開市日
館林町市	古衣 苗木 雜貨	大字館林町	每月 三、八ノ日
青物市場	蔬菜 果實	大字谷越村	每年 七、八、九月
織物市場	絹糸 織物	大字館林町	每月 四、九ノ日

交通

東武鐵道 郡内交通機關の不備なるを憂ひ館林町の有志斡旋奔走して東武線を延長せしめ館林を貫通して足利町に達せしめたるは實に明治四十年八月二十七日なり郡境内の哩程は六哩五十七鎖にして川俣、館林中野の三驛を設置す後益時運の發展に伴ひ現時足尾、桐生、葛生、伊勢崎間に達する延長を見るに至れり

道路 郡内に於ける縣道は古河街道、川俣佐野道、館林梁田道、佐野古河道等にして延里數九里二十二町里道は境館林道、荒金、赤岩道、館林停車場道、中野停車場道等延里數六里二十四町縣補助道には館林栗橋道二里二十九町其他郡補助里道二十七條延里數三十八里等あり何れも平坦砥の如く車馬の往來頗る便なり

河川 利根川は新田郡より來り本郡大川村より大箇野村に至る航路六里三町堤塘一萬三千百餘間川俣村に船橋を架し行通の便に充つ長二百五十六間舟楫の便運輸の行極めて盛なり

渡良瀨川は足利、安蘇二郡より來り本郡渡瀨村より海老瀨村に至る航路五里十九町餘堤塘一萬三百四十一間舟楫の便又盛なり下早川田村に船橋を架す長四十二間あり

下利根川

水枕 膏騰度短宵 波煙 蘸月白迢々 梁川 星巖
 一聲 艦板 天方曉 已到 潮來 十二橋
 東寧 河上 儼扁舟 短棹 疎篷 兩岸秋 草場 船山
 風露 滿身 人不睡 蘆花 吹入 武藏州

百里江程一夜間 長炊繫纜荻蘆灣 大沼枕山
 東船西舫知多少 盡候天明入水關
 利根川の底は濁りてうは澄みて 古今文帖
 ありけるものをさされてくやく 夫木集
 利根川の河原をゆけば小夜千鳥
 いしむ道ないちかへりなく
 笹わけは袖こそやれめ利根川の 新勅撰
 石はふむともいさかはらより

學事の概況

一小學校 郡内二十二ヶ町村悉く尋常高等小學校を設置す、兒童數尋常科男五千二百五十三人女四千六百七十五人高等科男七百四十七人女二百九十六人なり。學齡兒童の就學歩合男九九・二九女九八・一四にして平均九八・七五なり。設備概ね完成し、教授訓育の狀況等亦漸次改善せられ見るべきもの少からず

二實業補習學校 郡内に於ける實業補習學校は總て町村立にして、學校數十二生徒數六百九十九人、館林實業補習學校及小泉實業補習學校女子部の外は凡て農閑期を以て教授期節となし、修業年限は二年乃至三年なり

三青年團體 青年團體は郡内各町村に設置せられ、團體數二十四支會八十七會員數三千七百十八人にして郡に聯合青年會を設置し之が指導統一を圖れり。各團を通し主要なる事業は農閑期に於ける夜學會農作物試作及品評會道路溝渠の修理体育の獎勵文庫の設置等なりとす

四教育會 私立邑樂郡教育會は郡内有志者を以て組織し會員約一千名

本郡教育の改良上進に貢獻せる所少からず

五五種學事會 郡内を東部中部西部の三部に分ち現職小學校教員を以て組織し教授訓育等小學校教育に關し常に研究調査を爲し教育の改善に資する所少からず

池 沼

城沼 館林町にあり周圍三里二十丁面積十四萬八千六百八十六坪上古水溜ありしも知るべからず邑樂は大海の義と云ふ近來沿岸多く葭葦生せしを開墾して水田となす赤井氏の館林に築城せし時此沼あるに因りて頗る要害たり東西に長く南北に狭く且南躑躅ヶ岡に沿ひ四時の風景に富めり

多々良沼 日向村にあり周圍二里十一町面積三十九萬五千五十八坪あり萬壽二年沼の北岸に寶日向なる者踏躑を設けて鑄造を始む故に此の名あり西南は廣く二岐に分れ東北に狭く水底淺し鯉、鯰、鮒等を産す

近藤沼 青柳村字近藤新田にあり周圍一里六町面積十萬六千八百七十六坪赤井氏が城の頃圍沼にして後北條氏の領するに及び村民に貸與し毎年貳貫文を納むと云ふ享保四年松平右近將監清武の時より鷹場となり漁業を停止せり爾來土民生計に困しみ城主に請ふこと再三同六年に至り再び之を貸與す明治以後官有となる水利は周圍の水田に灌ぎ下流東に赴き字菱沼に至り谷田川に入る

板倉沼 板倉村字大新田にありて周圍二里十三町面積三十八萬七百九十七坪あり

往古利根渡良瀬兩川激水の時瀦溜せし選跡にして伊奈良沼と稱せしが
中古村名と共に板倉沼と稱し官有に屬す寶曆十一年六月細谷、大荷場
大曲、内藏新田、離五ヶ村より本沼開墾の名義を以て拂下を出願せり
與るに板倉村の故障あるを以て遂に評定所の裁決を仰き六ヶ村より金
百兩を上納し二分して其一を板倉村所有とし一を離村外四ヶ村の所有
に定む且海老瀬村之に加ふと天明二代官布施彌市郎之を檢地すと云
ふ現今は五ヶ村全く其の縁を絶ち唯板倉海老瀬二ヶ村民の共有地とな
れり

招魂社 館林町字代官町にあり

由緒明治二年九月館林藩士秋元禮朝去歲戊辰役武總奥羽の野に戰歿せ
し三十九人の靈を近藤村大谷原に祭壇を造りて之を祭り一祠を建設
して招魂祠と稱す且藩主より祭典料を寄進す八年五月官祭に列し招
魂社と改む

九年六月明治天皇東巡の際會上野の地を過ぎし時栃木縣知事鍋島幹
を宣命使として招魂社に派遣せしめ金幣及宣詞を賜ふ十四年三月社
殿を館林町字代官町に移す大正三年十一月舊藩士正三位勳一等小野
田元熙主唱となり社殿を改築す境内に櫻樹數株あり春和の候花爛熳
として釵香帽影絡繹たり

尾曳稻荷神社 館林町字稻荷郭にあり

由緒大袋城主赤井照康嘗て狐兒の一命を救ふ其夜一老翁來て曰く我れ
は稻荷新左衛門なり今日公の鴻恩謝するに物なし顧みるに公の城要
害宜しからず是より北に當り菊間長者か住せし地頗る要害なり我れ

明夕來て繩張すべし宜しく此に築城せよと翌夕に至れば老狐果して
尾を曳て先導す其痕跡城郭の形を成す照康是に於て城を築き尾曳城
と稱し弘治二年正月移り居す後城中に一郭を設け尾曳稻荷社を鎮座
す

富士嶽神社 六郷村大字小桑原村字富士西にあり

由緒其創立不詳天正年中館林城主榑原康政再建す後寛永九年松平忠次
明曆二年松平乗壽寛文七年館林宰相綱吉等交々營繕せり爾來館林城
主代々修覆して尊敬最も厚し明治五年十一月郷社に列せらる

西丘神社 西谷田村大字西岡村字赤城塚にあり

由緒天慶七年三月鎮守府將軍藤原秀郷の勸請なり初秀郷平貞盛と共に
平將門を討じ功を以て鎮守府將軍に任せられ下野武藏二國の守とな
り唐澤山に在城の時宮殿を此に建立すと云ふ

高島神社 大箇野村大字大高島村字高島にあり

由緒延喜元年菅原道真讒を蒙り筑前大宰府に左遷せらる時に其臣岩下
某之に隨行せん事を請ひ止まず道真許さず然れとも其忠勤を感じ自
畫の像を與へて之を慰む岩下涙を拂て郷國出羽に歸り之を子孫に傳
ふ後文暦元年春岩下勝之進畫像を携へて京都北野天滿宮へ參詣し歸
國の途次此地に來り一社創建の念を起し國主に請ひ社殿を建立す依
て高島と稱す

雷電神社 伊奈良村大字板倉村字雲間にあり

由緒人皇三十四代推古天皇の御宇聖德太子の創立にして後 桓武天皇
延暦年中坂上田村麿東征の時祈請して社殿を修營せり天文十六年地

頭篠崎三河守之を修理し元龜四年長尾顯長更に造營す延寶二年九月
徳川綱吉館林在城の時崇敬殊に篤く修覆を加へ且葵紋を賜はれり上
野國神名帳に従四位上大雷明神は則當社なり

長良神社 富永村大字瀬戸井村字宮下にあり

由緒祭神藤原長良は東國平定の爲め下向あり衆を恵み仁惠を施し任滿
ちて後病に罹り薨去す

貞觀十一年三月大和國春日神社の末社に列祀す時に上野の人赤井良
遠本國に勸請せん事を奏聞しけるに叡感淺からず乃ち本村に宮殿造
營を勅許せらる因て全年九月遷宮式を行ひ爾來佐貫莊の人民信仰厚
く宮附十二ヶ村の總鎮守とす

長柄神社 長柄村大字篠塚村字馬場にあり

由緒元慶五年六月朔日大和國より藤原長良の靈を配祀すと云ふ本村住
人篠塚伊賀守重弘嘗て祈請し大に戰勝を得べしと云ふ爾來郷民の信
仰厚く明治五年十一月郷社に列せらる

善導寺 館林町字谷越町にあり

由緒人皇四十三代元明天皇和銅元年僧行基の開創なり行基東國遊化の
時當地に錫を留め土橋、加法師兩村の間に庵を結で住す後建久四
年三月頃阿見生法師なる者行基の舊跡を慕ひ草庵を修葺して住し見
生院と云ふ 九十一代後宇多天皇建治二年十月良曉上人専ら修道場
を再興し大伽藍となし終南山見生院善導寺と改稱す爾來領主岩松氏
由良氏赤井氏長尾氏北條氏其壇林たり天正年間寺院殆と荒廢に歸せ
り適幡隨意上人あり行基開榛の勝地を慕ひ來りて切に再興を志す時

に城主神原康政深く上人に歸依し一寺を建立して香花所に成さんと
欲し舊地の諸堂宇を今地に移す因て莊園百石を附す後見生院を改
め見松院と號す東照公十八壇林を選するに及んで本寺も亦其一に加
へらる且徳川氏より供田百石諸役免除の朱章を賜ふ明治二年二月關
東十八壇林救願所の論旨を下賜せられたり

善長寺 郷谷村大字當郷村字丸屋敷にあり

由緒大永五年六月赤井家範其兄氏信菩提の爲め一字を建立し大雲惟俊
和尚を請して開山となす後神原氏領主たるに及ひ尙令久住の壇林
たり元和九年松平忠次莊田五十石を附せらる將軍家光の時本郡大曲
村の内を以て五十石の朱印に換へ下賜せられたり

遍照寺 六郷村大字新宿村字上宿にあり

由緒建久九年新田義重祖宗の冥福を祈らん爲め初當郡矢島村に一字を
建立し慈觀上人を開山となし以て菩提所となせり後北朝貞治年中俊
海僧都に至り大に恢復を計る之を中興の開山と稱す十三世宥圓の時
館林城主神原康政大に之に歸依し天正十八年寺を當所に移し祈願所
とし黒印地を寄進す慶安元年十八世行昌の時松平忠次より寺領を下
賜せられたり

茂林寺 六郷村大字堀工村字中山東にあり

由緒開山大林正通禪師は美濃國の人なり弱冠薙髮して諸國を巡錫し應
永二十三年當國に來り一小庵を結で居る應仁二年八月當國青柳城主
赤井照光禪師の徳風を欽慕し一伽藍を建立し青龍山茂林寺と號し禪
師を請して開山をなす後領地の内八万坪を寄進せり永祿年中長尾

景長再興し中興の開基となり堂宇を修補し寺領を寄進す徳川氏の時に至り朱印地を下賜せられたり寺の什寶分福茶釜は紫金銅と唱ひ無盡藏の妙を得たりと稱し其名江湖に著し

普濟寺 赤羽村大字羽附村字上志柄にあり

由緒大永三年の創立にして開山は伊俊大雲禪師なり初め笹ヶ崎(今の下志柄也)にありしが大文中長尾景長の歸依に因りて今の地に伽藍を再建せり後第五世花翁禪師の時天正十八年徳川家康より朱印地を賜はり寺門始めて旺盛たりと云ふ

光恩寺 永樂村大字赤岩村字櫻山にあり

由緒人皇五十二代嵯峨天皇弘仁五年弘法大師諸國遊化の時草創の靈地なりと云ふ當時密法廣通の爲め一字を建立し大師自作の木地藏を安置し爰に暫く留れり後醍醐天皇元亨元年勅詔に因りて赤岩山光恩寺と稱し七百石の朱章を賜ふ後慶安元年七月徳川氏より十六石餘の寺領を賜ると云ふ

白山寺 小泉町大字上小泉村字城の内にあり

由緒天文三年八月小泉城主富岡秀信の開基にして開山を梵海正音と云ふ天正十八年富岡家没落せし後伽藍廢頽せり是を以て七世の僧傳國深く之を憂ひ伽藍興復の淨願を起し壇林を勸む時に地頭小栗又一歸依崇信他念なく寺領を幕府に請ひ修理料として金若干を下賜せらる後屢祝融の災に罹りしが嘉永三年僧春山壇徒と謀り本堂を建立し以て現今に至る

高德寺 大川村大字古海村字番場にあり

由緒開山兒島高德正平年中國良親王上野國に駐ると聞き陰かに之を護翼し再舉を計らんと欲し潜行して當國に来る然るに南風競はず新田脇屋等の諸士諸國に流離し或は戰歿し勢漸く窘り又存すに由なきを知り其迹を韜晦し本村に來り隱栖し薙染して志純と號し此地に一小庵を結び専ら佛三昧に入ると云ふ後弘和二年十一月廿四日歿す享年七十二法號を志純義晴大德覺位と號す

雲龍寺 渡瀬村大字下早川田村字島にあり

由緒天文二十二年足利義晴臣早川田喜六郎唯種の開基にして開山を月舟正初和尚と云ふ後ち衰微せしが元龜年間再興すと境内に義人田中正造の墓ありて時々香花絶えずと云ふ

名 勝

躑躅ヶ岡 往古躑躅ヶ崎又は花山と稱す赤羽村大字羽附村字大袋にあり廣袤一町餘滿園皆躑躅にして樹數八百餘株あり多くは老木にして全幹蘚苔に絨せられ古色黝然悉く凡種にあらざるなり其花歴亂たる時に當りて遠く望めば絳雲彩霞の如く近づけば灼爍として猩紅の如し嵐光波色と相掩映し其美言ふ可からず其東南は桃林を擁し西北は城沼に枕み赤峰晃山の巍然たる歴々眸中に横り眞に天然の勝區たり嘗て一婦人故ありて此沼に投して死す土人爲に杜鵑花一株を此地龍燈松の傍に植え埒柵を設け制札を建て摘花折枝を禁せしと云ふ寶永四年二月柳原忠次新田義貞勾當内侍の遺愛せる躑躅を新田庄南田島郷宮下氏に乞ひて此地に移植す寛文年中館林宰相綱吉之を愛し尙下野國日光山より躑躅

數株を輸し培植し八百八株となると云ふ嘉永二年秋元氏も亦之を愛し樹唯赤紅のみにして聊か雅致を缺くを憾み更に紫白を本郡小桑原村密藏寺より獻本せしめ此地に移植し更に制札を建て堅く摘花折枝を禁せしと明治年間に及んで民有に移り殆ど荒廢に歸せんとせしを時の郡長村山具瞻等の斡旋に因り遂に郡有となし改めて公園と稱す十九年五月皇太后皇后兩陛下行啓ありしより爾來其名天下に著れ且年々培養増植し益繁盛を極むるに至れり

- 一 水城濠線 漫山躑躅約 金井之恭
- 此花誰所種 忠烈羽林公
- 館林城外試過從 躑躅滿山錦繡濃 揖取素彦
- 五波溪頭看相似 隔濠僧院講時經
- 躑躅千株湖一涯 訪花人似簇雲霞 高橋蘭舟
- 風光爛熳春將晚 愛此紅拾二月花
- しはらくは花の色なる月夜かな 芭蕉
- 扇透く空やつゝじの三四月 眞路

三ノ丸 舊城址なり館林城の現存せし時郭内を分て本丸二ノ丸三ノ丸と稱す其一なり廢城後藩士十四名の試作地たりしが明治二十七年四月舊藩主秋元氏の有に歸す二十九年五月故藩主秋元志朝追贈の恩典を得て從三位に叙せらる是に於て舊臣等相揃りて豊碑を建て其功績を不朽に傳へ且松杉等を移植し山を築き又櫻樹數百株を栽培し功臣の碑を建て以て遊園地となせり春和候花爛熳雲堆雪簇風光佳絶たり

毛氈山 高根村字山神脇にある一小丘にして多々良沼に相對す面積約四町松林の下躑躅繁生す開花の候撩亂恰も紅氈を敷きたる如し故に毛氈山の稱あり

板倉沼 伊奈良村大字板倉村字大新田にあり村の郷社雷電神社を環繞す周圍三里餘古來の勝區にして東方翠黛天際に聳え水煙彷彿の間に眺むを筑波山となす其北に當りて浮嵐暖翠歷々一眸に集まる者下野連峰群嶽となす西は淺間赤峯を雲煙蒼靄の際に仰き近くは村家漁舍を桃林松杉の間に點綴するを見る南は富嶽の巍然たるを疎林修竹の間に隱見す萬頃一碧茫茫として水光天に接し漁舟泛々南去北來白鷗閑に水に眠り游魚時に淵に躍る或は菰蘆の間水禽聒々の聲を聞き清景掬すべし若し夫れ花の艶月の清雨の濃雪の淡旗亭に登りて囑望すれば興湧き感起り轉た禁する能はさるの念あり

- あふことはいならの沼のおほる草 夫木集
- よそにや戀し袖はつくとも
- あふる草波は上にぞなかりけり 爲家朝臣
- 伊奈良沼のはれぬ五月雨

館林城址 弘治二年正月大袋城主赤井照康始めて城を館野ヶ原に築き移り居り館林と稱す其子照景の時老臣毛呂季忠不軌を謀る照景逃れ足利に赴き姉婿長尾顯長に據る顯長變を聞き赤井七騎と赤井老臣小曾根政義を援け季忠を討つ元龜元年謀て和に托し季忠を圍み自殺せしむ是に於て毛呂一族亡ぶ顯長代て城主となり照景を逐つ照景依て宇都宮に走り結城晴朝に據り後行く所を知らずと云ふ天正十一年五月北條氏直館林を攻め謀て顯長を退け家臣酒井左衛門尉忠義を以て城番となし後北條氏規に與ふ氏規家臣南條因幡守を城代となし之を守らしむ十八年七月豊臣秀吉其臣石田三成長束正家等をして館林を攻めしむ城要害に據て抜く能はず是に於て和を議し氏規城を以て降る徳川家康關八州を

統ぶるに及んで其旗下榊原康政を此に封じ十萬石を與ふ康政大に規模を改め城の溝渠を穿ち城郭を設け又町割を定む康勝忠次等後を襲ふ正保元年松平乘壽城主となり子乗久に至る寛文元年八月徳川綱吉封を受け館林宰相と號す後將軍職を襲ふに及び長子徳松丸後を襲ふ在城三年にして天す其後寶永四年に至るまで破城となる全年松平清武封を繼ぎ再び築城して移り居る武雅武元封を襲ふ享保十三年九月太田資晴城主となり次で大坂城代に轉す此より元文五年まで城番となり鳥居忠暲等數名輪番す全年五月資朝の子資俊後を襲ふ延享三年九月遠州掛川城に移る松平武元再び封を繼ぎ六萬千石を食む武寛齋厚等後を襲ふ天保七年井上河内守正春柵倉城より此に移り城主となる弘化二年十一月濱松城へ封を移さる時に山形城主秋元志朝此に封せらるる後ち館を館と改む大に人材を登用し藩政を釐革し文武を更張し勤儉以て風を改め窮民を賑恤す依て庶民其鴻徳を仰ぐ後致仕す禮朝封を襲ふ明治戊辰役卒先勤王を唱へ奥羽へ出兵し戦功ありて賞典録一萬石を賜はるる後廢藩置縣となり東京に移る七年二月城内大名小路より火を失し餘焰延て城樓を焼き數百年の名城是に於て烏有に歸し後田圃となり人をして轉た麥秀の嘆を發せしむ

小泉城址 小泉町大字上小泉村にあり

延徳元年十月富岡主税助直光始めて築城すと云ふ其子秀光専ら佛道を修め天文三年長子秀信をして郭内に一伽藍を建立し祥平山龍泉院と號す其後秀信秀親秀高等相繼ぎ秀朝に至る秀朝北條氏直に屬す天正十八年豊臣秀吉北條氏を小田原に攻むるに當り秀朝兵を率ゐ小田原に赴き

軍議に與かる此時小泉城には小林河内、近藤石見等固守す北條氏滅ぶるに及び因て和を請て解散す秀朝後大坂に至り松倉重政に従ふ元和元年大坂役奮戦して遂に戦死す時に五月六日より是に於て富岡氏亡ふ家臣杉山忠成なる者主家滅亡の際舞木に蟄居す初め豊臣氏に任へ千五百石を食む後叔父杉山源兵衛の讒に會ひ終に其所領を沒收せられ爰に廢城となると云ふ

赤岩城址 永樂村大字赤岩村にあり

佐貫次郎太郎嗣綱の築く所なり後ち十世廣綱に至り文治四年青柳城に移るに及び廢城となる

青柳城址 六郷村大字青柳村にあり

文治四年佐貫廣綱赤岩より來りて城を築き爰に居る十世赤井照康に至る時に天下大亂群雄四方に割據し互に罅隙を窺はんとするに及び本城要害に乏しきを察し天文二十二年五月羽附村大袋城に移る是に至り廢城となる

大袋城址 赤羽村大字羽附村にあり

赤井照光の居城なり其子照康に至り城を館林に築き移り居る時に弘治二年なり是に於て廢城となる

篠塚城址 長柄村大字篠塚村にあり

元弘の頃篠塚重弘初めて築き居る正平三年重弘隱岐國に終りしを以て依て廢城となる

片見因幡守城址 大島村字寄居にあり

片見因幡守師方は館林城主赤井照康旗下七騎の一なり數々戦功あり天

正十八年に至りて歿す後廢城となる

正義城址 全村字正義内にあり

磯ヶ原日向守正義爰に居る後正義故ありて死すと云ふ其後廢城となる

中野景春壘 中野村字元宿にあり

正和の頃中野景春壘を築く子孫世々爰に居る永正年中小泉城主富岡秀

光に屬し天正十八年秀吉關東を略定するに及んで富岡氏と共に亡ぶ

茂木城址 中野鶴村にあり

元享二年新田義貞の旗下茂木刑部介貞良爰に居城す其孫良忠に至り赤

井氏に屬し姓を垣上と改む其子正照の時に至り長祿三年廢城とす

赤井照光墓 永樂村大字赤岩村字櫻山にあり

赤井照光館林城に歿す遺言に依りて爰に葬る後人之を堂山と稱す其墓

石板碑なり表に「赴大學院本譽法蓮居士」脇に天文十四年七月七日不詳

照忠俗名赤井山城守照光とあり

兒島高德墓 大川村大字古海村字番場にあり

高四尺五輪塔にして文字剝落せり石質疎朴にして古致あり高德永徳二

壬戌年十一月廿四日歿す法號を志純義晴大徳と云ふ

大谷休泊墳墓 多々良村大字高根村字觀音にあり

其形狀角にして竪二尺三寸巾一尺二寸敷石四段下段は方六尺次は二尺

四寸次は一尺七寸上段は一尺三寸あり表に圓寂大谷休泊關月居士覺位

其脇に天正六戊寅天八月廿九日とあり

人物

大谷休泊 休泊通稱新左衛門上州平井城主上杉憲政の臣にして大永元

年生る意を土木の道に注ぐ當時曠漠不毛の地多く居民亦寡なし是に於

て休泊大に憂ふ會城主より勸農開拓の命を受く依て新田山田邑樂の三

郡に出張し専ら土工に従事せり天文二十年上杉家滅亡す休泊終に本郡

成島村に來り居を構へ、益々疏水開拓の事業に勉む又水利を按し溝渠

を穿ち灌漑に便にす日向村多々良沼又渡瀬川より用水を引き縦横に分

流して十六ヶ村の用水となす爲に水田數百町歩を得依て名けて休泊堀

と云ふ又近傍の土質粗惡にして粟穀に適せざるを以て新田郡太田金山

より稚松數十萬本を採り此に栽培して山林となす大谷原是なり天正六

年八月二十九日病て歿す年五十八高根村に葬る明治十五年三月政府山

林共進會を開き休泊の功を追賞して金星銀盃三等褒賞金拾五圓を賜ふ

嗚呼休泊身武門に生れ方を戎馬の道に盡さしめば又大に爲すあるべし

然るを一朝兵戈を捨て、勸業殖林に留意す其胸宇又大に見る處あるべ

し偉なる哉

生田萬 姓は菅原名道滿又國秀花山と號す館林城主松平右近將監武厚

の臣なり幼より學を好み平田篤胤の門に遊ひ皇典學を修め其蘊奥を究

む資性慷慨悲憤常に己の相貌を刀身に映し英雄の相なしとて愁嘆せり

と云ふ多年藩の學務師範たり後致仕して新田郡荒井村に塾居し著述を

以て業となす天明七年師篤胤の命を受け越後國柏崎に至り神道を講ず

時に講國大に飢ゆ米價昂騰し柏崎の人民又困憊し救を代官に乞ふ代官

顧みず且他より寄寓する者を逐ふ是に於て人民大に蜂起し其無情を攻

む會々萬之を聞き大に憤慨し同志等と謀り奉天命誅國賊と大書したる

旗を翻し柏崎の陣屋を襲ひ吏を殺傷して自殺す官其黨を捕ふ萬の妻子も亦捕へられんとす妻乃ち愛兒を刺し身も亦自刃して殉ふと聞く者感嘆せざるはなしと云ふ

大久保鼎 鼎諱は一貫初新助と稱し世々秋元侯に仕ふ人と爲り短小にして勇悍眼光人を射音吐鐘の如し武技を嗜み擊劔を善く又書を讀み古今の興廢を論す毎に曰く大丈夫生きて五鼎を食ますんば死して五鼎に烹られんのみと因て鼎と改め無二齋と號す常に好んで村正の刀を帯ひ時人畏憚す癸丑以來幕府政を失ひ國家事多し鼎慨然として尊攘の志を抱く此の時に當り長藩夷艦を馬關に砲撃す幾もなくして征長の議起る鼎是に於て幕議を論駁し上は以て宸襟を安んじ下は以て長藩の冤を解かんと同志八人と死を誓ひ鬻を截り江戸藩邸に赴き執政に見え慷慨激論頗る粗暴に亘る有司依て之を罪に抵さんと欲す侯之を許し退て命を俟たしむ候深く幕長の不和を憂ひ藩士某等に命して公武の間に周旋せしめ遂に使を山口に遣す鼎偶々之を聞き往かんと請ふ執政聽かす是に於て蹶然として曰く機失ふべからすと潜に西上す有志人をして之を追捕せしめ遂に死を賜ひ其家を没す時に元治元年四月十六日なり鼎時に年四十一屍を江戸角筈多聞院に埋む

大正四年十二月廿八日印刷
大正四年十二月卅一日發行

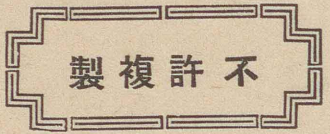
著作兼發行者 千葉縣香取郡東大戸村大字川尻百二十番地 黒 靜 三



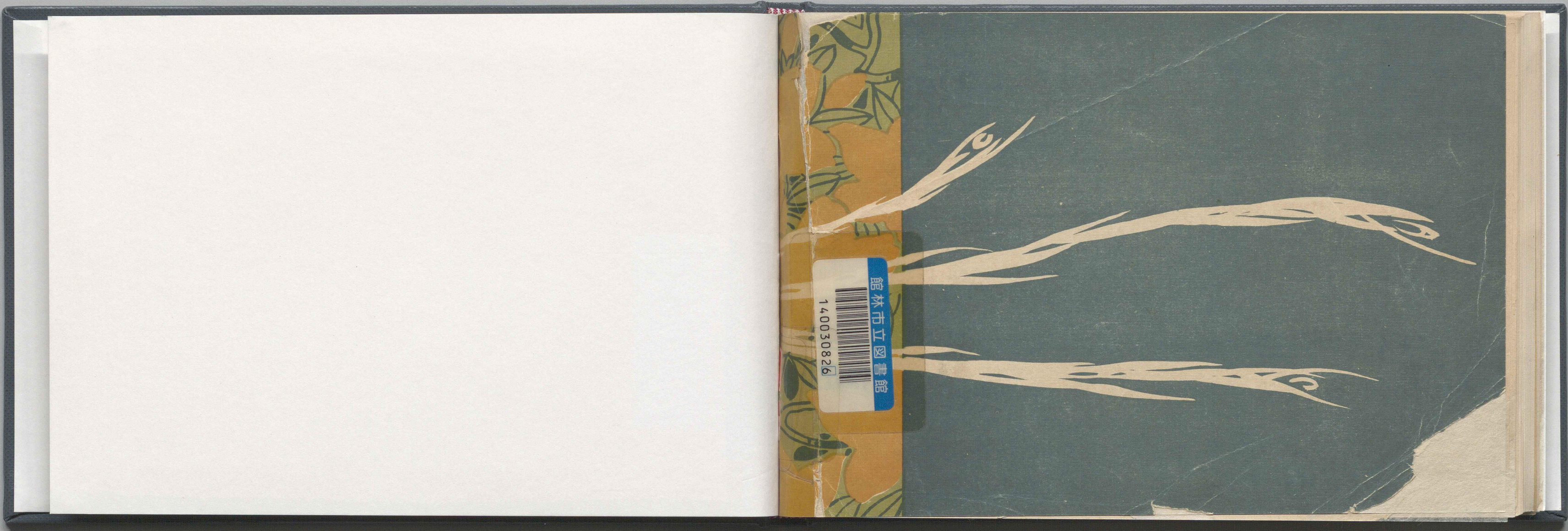
印刷者 東京市神田區南乗物町十五番地 葛 西 虎 次 郎

印刷所 東京市神田區南乗物町十五番地 青 雲 堂 印刷 所

發行所 群馬縣邑樂郡館林町 八州新聞館林支局

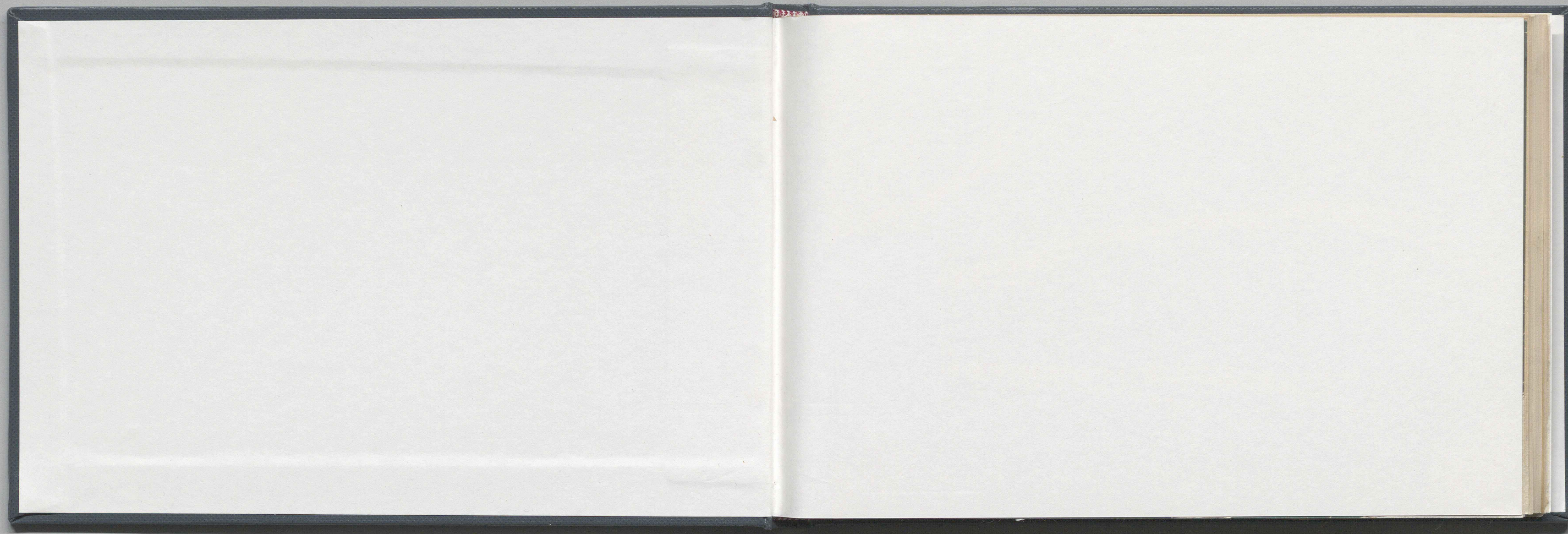


不許複製



館林市立図書館

140030826



館林市立図書館

0276-74-2346



140030826

